

## 《研究ノート》

# ガマルニクのスターリンあて電報にみる ソ連極東の国防力強化策（1932 年前半）

寺山 恭輔\*

Strengthening National Defense in the Soviet Far East in the First Half of 1932:  
Reading the Cryptographic Telegrams Sent by Gamarnik to Stalin

TERAYAMA Kyosuke

### 要旨

1931年9月18日の満洲事変勃発後、満洲と隣接するソ連はシベリア出兵の再来を危惧し、極東地方の国防力増強を進めた。1920年代末に独裁的権力を握ったスターリンが中心的役割を果たしたが、極東地方に派遣されて実際に指導したのはヤン・ガマルニクという人物だった。彼は1929年に労農赤軍のNo. 2で、政治局長という重要なポストに就任して国政に携わっていたが、1920年代には極東地方に派遣されソヴィエト組織や党組織を指導した経歴を有し、極東地方の事情に非常に詳しい人物だった。1932年初めに極東に派遣されたガマルニクは5月初めにモスクワに帰還するまでの約4ヶ月間、スターリンら中央の指導部に詳細な情報を電報で伝えていた。本稿は従来の研究で、まったく言及されなかったこれらの電報を分類、紹介し、ガマルニクの活動とその中央の政策への反映を明らかにすることを目的としている。

キーワード : ガマルニク、スターリン、ソ連極東、満洲事変、国防力

Keywords : Gamarnik, Stalin, Soviet Far East, Manchurian Incident, Defense Policies

### 目次

1. はじめに
2. モスクワ発、シベリア鉄道沿線(ノヴォシビルスク、イルクーツク)における活動
3. ハバロフスクでの活動

---

\*東北大学東北アジア研究センター

『東北アジア研究』27号(2023年)、31-83頁、doi: <http://doi.org/10.50974/00136709>

© 2023 TERAYAMA Kyosuke

本著作物は、特に記載がない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスの下で提供されています。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



- 3.1. 鉄道・自動車による輸送、石炭採掘
- 3.2. 造船所の建設
- 3.3. 発電、セメント工場、軍需工場、木材調達、労働者確保、強制労働の利用
- 3.4. 塩の確保
- 3.5. 航空部隊、航空機製造、民間航空、飛行場、ガソリタンク建設
- 3.6. 通信、新聞
- 3.7. 赤軍兵士の収容、住居、軍の増強
- 3.8. アムール小艦隊、水運、ソヴトルグフロート
- 3.9. 食料
- 3.10. 沿岸防衛(機雷敷設、砲台設置、潜水艦建造)、陸上部隊の再編
- 3.11. 警察、コルホーズ軍団、北満委員会
4. ガマルニクの健康問題、モスクワへの帰還
5. おわりに

## 1. はじめに

1931年9月に勃発した満洲事変に対して、満洲と隣接するソ連極東地方へモスクワから1932年初めに派遣され、国防力増強に顕著な役割を果たしたソ連陸海軍事人民委員部政治局長ヤン・ガマルニク(Гамарник, Ян Борисович, 1894-1937)の活動の詳細を明らかにすることが本稿の目的である。ガマルニクは、極東共和国併合後の1920年代に派遣され、6年も過ごしていた極東地方の事情に詳しく[寺山 2017b]、スターリン(Сталин, Иосиф Виссарионович, 1878-1953)ら党指導部が極東政策を立案する際に頼りにしていた。筆者はすでに1930年代前半のガマルニクとスターリンの関係に焦点を絞って明らかにしたが[寺山 2020]、本稿では約4ヶ月という短期間に絞り、ガマルニクが現地からスターリンらソ連指導部に送付した電報を紹介する。従来の研究ではまったく見過ごされてきたこの史料によって、より詳細に彼の活動の実態が明らかになるだろう。この極東での滞在期間中に、彼は各地を視察し、様々な問題点をスターリンらモスクワの指導部に伝え、国防力強化に関して様々な方策を立案し、実行に移していた。その実態を明らかにすることは、当時のスターリン指導部がどのような意図のもとで極東の国防力強化を図っていたのかについて理解することを可能にし、スターリン体制下のソ連国家の軍事化を考察する上できわめて興味深い材料を提供することになるだろう。

本論では、ガマルニクが極東に到着するまでの活動を簡単に述べた後、ハバロフスクに到着後に関しては、彼が取り組んだ項目ごとに電報を分類してまとめることにする。そして最後にモスクワへの帰還の過程について触れることにしたい。

本論で紹介する文書は、暗号に変換する前の手書きメモの状態で残されているものが多く、また電報という性格上、圧縮された表現が多いため、完璧に読み取れたのか筆者には確信できない

ところもあることをお断りしておく。もちろんスターリン個人や彼を含む複数の党指導者に送られた電報が最も重要だが、報告する内容によって、ガマルニクは宛先を変えている。一部、ガマルニク以外の人物が送付した電報も紹介しているが、これは電報が公文書館(ロシア国立軍事公文書館=РГВА)の同じファイルに保管されており、ガマルニクの活動と密接に関係していると判断したためである。ガマルニクの電報に対するスターリンらの反応、すなわち双方の電報を並べて成立する「会話」が判明すれば望ましいが、現段階で判明している例はわずかである。本稿はソ連の極東政策について、いずれ一書としてまとめるための準備作業として位置付けている。

## 2. モスクワ発、シベリア鉄道沿線(ノヴォシビルスク、イルクーツク)における活動

1931年12月末にガマルニクはスターリンの執務室を頻繁に訪れていた(12月22日、26日、28日)が、29日が最後となった[寺山 2020: 34]。おそらくこのあとにモスクワを出発したものと思われる。その出発前にガマルニクは必要経費としてかなりの資金を受領していた。1931年12月23日付のソ連財務人民委員代理レーヴィン(Левин, Рувим Яковлевич, 1898-1937)からロシア共和国財務人民委員部のマラホフスキー(Малаховский, Ефим Яковлевич, 1892-1938)への文書によれば[РГВА 9/29/42/32]<sup>①</sup>、極東へ出発する前のガマルニクに相当の資金が渡されていることがわかる。「ソ連ソヴナルコム[人民委員会]議長モロトフ[Молотов, Вячеслав Михайлович, 1890-1986]の指示で、陸海軍事人民委員代理ガマルニクの管理下に1000万ルーブルのクレジットを開設することを提案する。500万ルーブルは1931年のソ連ソヴナルコムの予備基金[фонд]、500万ルーブルは1932年の同じ基金からである」。これを受けてガマルニクはアントノフ(Антонов, この人物については特定できていない)に、「人民委員に[この文書を]渡してください」と書いている。すなわち、上司のヴォロシーロフ(Ворошилов, Климент Ефремович, 1881-1969)陸海軍事人民委員もこの資金について把握することを求めた。

1月3日にガマルニクはヴォロシーロフに、列車 No. 42 でノヴォシビルスクまで行き、イルクーツクには1月7日朝に到着、夕方までいる予定だ、と報告している[РГВА 9/29/145/3]。1月7日のヴォロシーロフへの報告は7項目からなりかなり詳しい[РГВА 9/29/145/4-5]。シベリアの状況を知ることが可能である。1月6日までの視察をもとに作成したものと思われる。以下に全文を引用する。

- ① オムスクでは第12師団司令部、ノヴォシビルスクではレヴァンドフスキー〔シベリア軍管区司令官〕<sup>②</sup>の詳しい報告、エイヘ〔Эйхе, Роберт Индрикович, 1890-1940, 西シベリア地方党委員会書記〕、グリュディンスキー〔Грядинский, Фёдор Павлович, 1893-1938, 西シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長〕から第12師団、第21師団の活動、幹部の状況について話しを聞いた。すでに実行された方策、私と革命軍事会議が追加的に行った評価により、期限内に師団は準備され、移駐は保証されているように思われる。

- ② ニトログリセリン火薬筒と窒素肥料工場の問題については、地方組織がケメロヴォにこれらの工場を建設するプロジェクトがあると判明、ヴェセンハ〔最高国民経済会議〕は計画を知っており建設には反対している模様だが、計画を見た限りでは注目に値する。シベリアの指導者たちは非常に断固としてこの計画を擁護している。グリュヂェンスキーを招いてこの問題についてヴェセンハの報告を聞くよう政治局に求めたい。
- ③ 砲弾工場について〔西〕シベリア地方党委員会は何ら具体的な提案はできず、規模が小さくひどく使い古された設備しかもたないグリュヂェフ工場に言及するだけだ。グリュヂェンスキーが砲弾の生産について近く検討し、私に報告することになった。
- ④ ノヴォシビルスクでは飛行機工場の場所選定のために、ЦАО〔中央航空部隊 Центральный Авиотряд のことか？航空関連だと想定されるが、確信は持てない〕によってイルクーツクに派遣されたバジョフ〔Бажов、バジョフが誰なのか不明〕と面会、彼はイルクーツクには適地はないと述べたので、イルクーツクで確かめるつもりだ。エイへとグリュヂェンスキーは適切な広場と全面的な協力を約束して、ノヴォシビルスクでの飛行機工場建設を提案している。シブコンバイン〔Сибкомбайн〕<sup>(2)</sup> を利用し、これを飛行機工場にするという別案もある。これならば秋には巨大な飛行機工場を持つことになり、その後にエンジン工場にもなる。
- ⑤ セメント工場について。1日17貨車〔17台の貨車に積載される量を意味する〕を生産するヤシキノ工場〔重工業人民委員部傘下の全ソ・セメント産業合同・ソユーズツェメント Союзцемент の工場で、現在もケメロヴォ州ヤシキノ市に所在〕が稼働中だが、通常国防事業に利用されている《00》ブランドのセメントを約40%生産している。我々にとって役に立つのか疑問視する意見もあるため、至急調べるよう委任した。シベリアの指導者たちは、ノヴォシビルスクから50kmに位置するチェルノレーチカ・セメント工場の建設を主張している。1日貨車25台分の生産力を持つ工場の建設を秋には終えることができ、約600万ルーブル必要だ。
- ⑥ エイへはコルホーズ員1万人を極東のための労働者として募集することに同意した。極東で完全な必要数を精査しエイへと連絡をとるつもりだ。
- ⑦ オムスク鉄道、トムスク鉄道の状態は非常に緊迫している。蒸気機関車が不足し、特に貨車は深刻な状況にある。

言及した人物たちは皆、予定通りハバロフスクに派遣されたし。以上である。

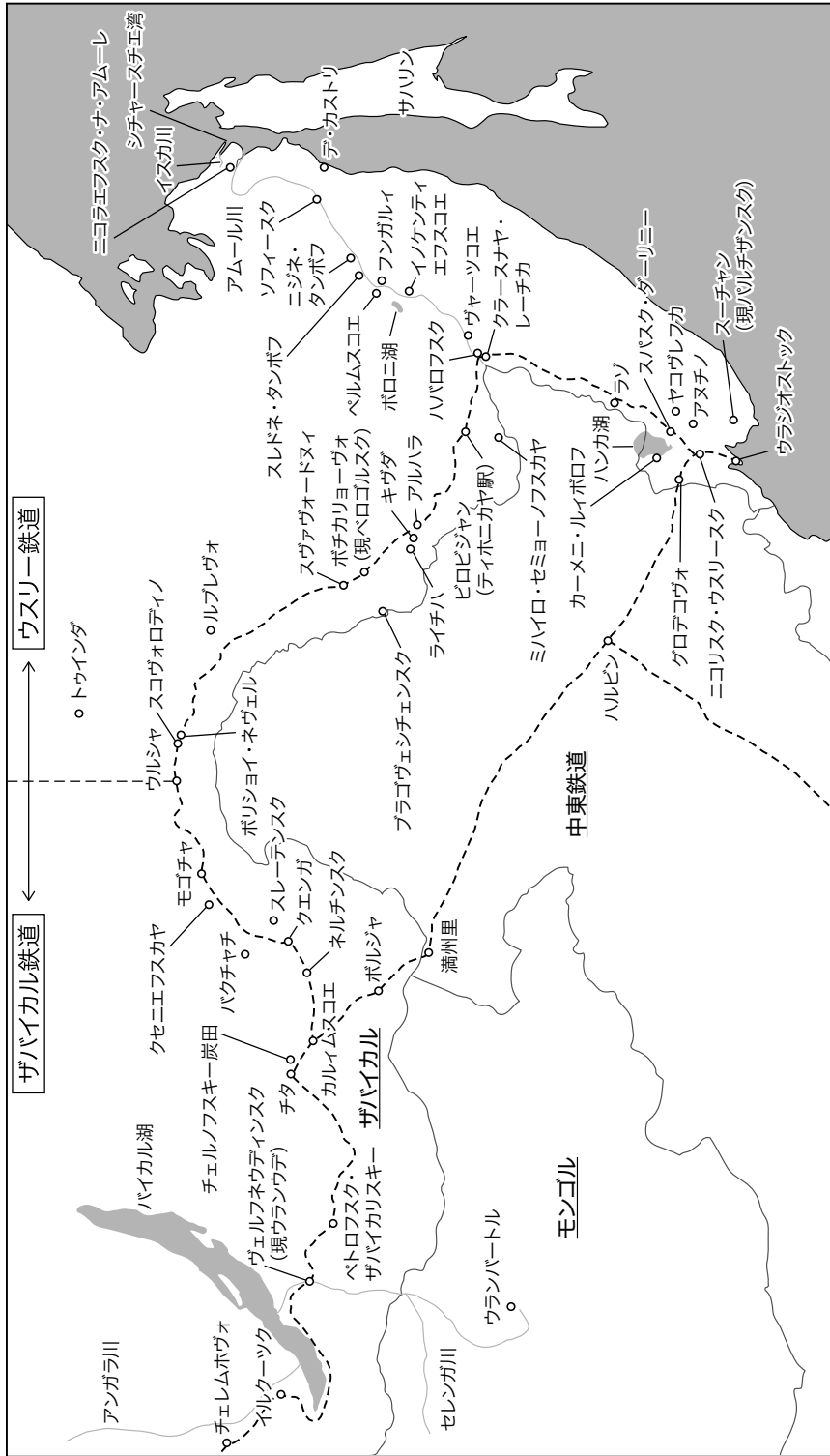
①はシベリア軍管区の管轄下にある部隊を極東へ移駐させる問題である。後背地における武器・弾薬、建設資材の製造基地の整備がシベリア地方に委ねられていることがわかる(②、③、⑤)。シベリアの幹部にとっては、自身が担当する地域への工場の誘致という側面もあり、地域指導者としての自身の地位や評価の向上を図る動きとも見て取ることができよう。地方の指導者に専門的な軍需工場建設のノウハウまで求めても良いのかどうかわからない。④からはモスクワがソ連

の東部で飛行機工場建設を計画していること、その場所の最終的な選定が予定されていることがわかる。極東で極端に不足する労働者をソ連各地から集める必要があり(⑥)、シベリアも例外ではなかった。極東への輸送問題(⑦)はもちろん当局の重大な関心事の一つであったが[寺山 1998b；2000a；2000b]、すでに 1932 年初頭の時点でかなり憂慮する事態に陥っていたことがわかる。

1 月 8 日にガマルニクは、スターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに打電した[РГВА 9/29/145/6-8]。

- ① アルクスニスとともにイルクーツクでゴリツマンの飛行機修理工場を視察した。現在ここで 200 人の労働者が働いているが、月に 15 台のエンジンを修理し、金属製飛行機 5 機の大修理を行っている。年間で M-17、M-34 のエンジン 500 台、飛行機 P-5 を 200 機、И-5 を 100 機修理するよう、ゴリツマンには遅くとも 6 月までに工場を拡大させる必要がある。ゴリツマンにはまた、1 km 四方のイルクーツク飛行場を 6 月までに完成させる必要がある[M-17 はドイツの BMW よりライセンスを受けて 1930 年に製造を開始した飛行機、戦車用エンジン。重爆撃機 ТБ-3 に搭載された。M-34 は偵察飛行機 P-5 や ТБ-3 にも搭載された。M-17、M-34 ともに開発に従事した設計者ミクーリンから M の名がついた。И-5 は複葉戦闘機である]。
- ② 2000 人の労働者が働いているドレッジャー工場は砲兵隊の器材の修理、砲弾の包装を行うことができる。工場は大砲の修理に関する検査修理に着手した。砲弾工場の設立、飛行機爆弾の製造のためには、新工場建設で空になる茶圧搾工場の建物を利用できる。砲弾製造の工場は、バタレイナヤ駅にある第 41 倉庫にある作業場を基盤に展開可能である。ブリヤン[Бурьян と解説したが、この人物について特定できていない]とトゥハチェフスキー [Тухачевский, Михаил Николаевич, 1893-1937、陸海軍事人民委員代理]に、これらの組織をすべて委任する必要がある。
- ③ ペトロフスキー工場の建設を断固支持する。
- ④ バイカル湖を横断する手段に関する問題の決定を急いでほしい。イルクーツクの同志たちはアクーロフ[Акулов, Иван Алексеевич, 1888-1937、オゲペウ議長第一代理]に自分たちの提案を渡した。少なくとも 2 隻の哨戒ボートをバイカル湖に送ることも頼みたい。

労農赤軍空軍長官アルクスニス<sup>(4)</sup>もガマルニクに同行していることがわかる。ゴリツマンはこの時、ソ連労働国防会議附属全ソ民間航空合同(いわゆるアエロフロート)の議長だった<sup>(5)</sup>。したがってゴリツマンの工場とは、民間航空機用の工場を指していたことになる。ドレッジャー(浚渫機)は砂金を採取するため、シベリア・極東で広く使われていた。その工場も軍事に転用するわけである。ペトロフスキー工場とは、ペトロフスキー鑄鉄・鑄造・機械工場(ペトロフスク・ザバイカリスキー市)のことだと思われる。極東との連絡の短縮化のため、バイカル湖を横断す



地図 1

る船舶も検討課題であった。またバイカル湖はセレンガ川を遡上してモンゴルと連絡する重要な拠点であったが、ガマルニク自身、1930年から31年にかけて政治局が採択した一連の対モンゴル政策の立案に主要な役割を果たしていた[寺山 2017a]。ちょうどこの1月7日、オゲペウ(ОГПУ=ソ連ソヴナルコム附属合同国家政治局)議長代理アクーロフがスターリンにバイカル湖を横断する砕氷フェリーボートの建造計画について報告していた。1919年に消失していたフェリーに代わる船で、1日に90貨車(1500tの貨物)の輸送を想定していた[Сахаров и Христофоров 2017: No. 3]。

同じ1月8日、ガマルニクはヴォロシーロフ、ルズタク(Рудзук, Ян Эрнестович, 1887-1938)にあてた電報で、「中央が管轄する建設資材の供給に採択しなかったため、すでに始まっていたアンガラ川架橋が中断している。東シベリア地方ソヴィエト執行委員会はこの建設に財政支援している。イルクーツクでは一連の国防的意義のある企業は、信頼しうる資金の送付に依存しているのに現在それがなく、ソヴナルコムがそれを保証すべきである。ルズタク同志はイルクーツクでこの問題を知り、全面的な支援を約束した」と述べている[РГВА 9/29/145/9]。中央が選定する、優先的配分を享受する組織のリストに入っているかないかによって、諸組織の活動が影響を受けていたことを、この電報は意味している。ルズタクはほぼ1年前の1931年2月シベリアを訪れていた<sup>(6)</sup>。

同じく1月8日、今度はスターリン、カガノーヴィチ(Каганович, Лазарь Моисеевич, 1893-1991、政治局員、以下本稿では断りがなければカガノーヴィチはこのラーザリをさす)にあててガマルニクは、「ザバイカルの国境地区での活動のため、220人の党員を早急に動員することについて東シベリア地方党委員会と合意に達した。国境地区を視察するため私とともにジージン<sup>(7)</sup>とグループが向かった。国境地域の諸地区を強化するため、東シベリア地方党委員会とともにモスクワから30人の活動家(地区党委員会書記や地区ソヴィエト執行委員会議長として)を派遣してほしい。オゲペウの地区組織の活動家の深刻な不足と関連して、諸地区への全権20名を派遣しようオゲペウに提起してほしい。この地方の事情に詳しく、価値ある機動的活動家として最近召還されたオゲペウの全権代表代理ガーリン<sup>(8)</sup>の復職を東シベリア地方党委員会が熱心に求めている。私もこれは合理的であると考える」[РГВА 9/29/145/10]。満洲北東部と国境を接するザバイカル地方は、当然当局が警戒する地域であった<sup>(9)</sup>。不足気味の党員を配置して、地域住民に対する教宣活動に従事させ、治安機関も補充してその活動を後援しようとしていたことがわかる。経歴を見るとガーリンは1931年11月に東シベリアから離れていたことがわかる。

1月9日、ガマルニクはソ連ソヴナルコム議長代理クイブィシェフ(Куйбышев, Валериян Владимирович, 1888-1935)にも、次のように打電した。「ウォッカ工場が歩兵学校のために場所を解放するのは絶対必要だ。元のバター製造工場で、現在ソユーズムカー〔«Союзмука»= Всесоюзное объединение мукомольной промышленности、製粉業全ソ合同〕の管理下にあり一部は住居に使われている建物にこの工場を移すことが可能だ。ソユーズムカーとソユーズスピルト〔«Союзспирт»= Всесоюзное объединение спиртовой промышленности、アルコール産業全ソ合同、

ソ連供給人民委員部の管轄下に1931年に結成]はその労働者に住居を確保するために一定の費用を負担する必要があるだろう。長期の工場の稼働停止を招かないよう、3日間でこの方策を実施することが可能である。極東地方とウラジオストックの組織は工場の移転に賛成である」[РГВА 9/29/145/12]。建築物が不足しているため、民生企業を解放し、軍の利用に供することを意味している。

1月10日にガマルニクがスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに送った電報には、「イルクーツクから7kmのイノケンティエフスカヤ駅にある飛行機工場のための広場をアルクスニスとともに視察した。鉄道管理局の配置、広場の規模に関して全く適切である。イルクーツクの同志たちは、現地地質学者の言葉を添えて地質も適していると断言しているが、我々の意見では基礎的な点検が必要である。イルクーツクにおける建設のすべての条件はこのようなものであり、すぐに工場の建設を始めたとしても、1933年以前にそれを完成させることはおそらくできないだろう。シブコンバインを飛行機工場の管轄下に置けば、1932年に容易に飛行機工場を獲得することが可能だろう（そしてその後のエンジンの展開も）というのが、アルクスニスと私の考えである。シブコンバインの状況が定まっていないとノヴォシビルスクで話を聞いたことが、このような案を我々が提示する理由である。シブコンバインを飛行機工場として利用できないのならば、工場建設の最終決定のためバラノフは、その助手マラホフをリーダーとし、彼を筆頭とする責任ある専門家グループをイルクーツクに早急に派遣すべきである」[РГВА 9/29/145/13 и об.]。シブコンバインの活用については、1月7日のヴォロシーロフあて電報でも言及されていたが、建設が進行中の工場の有効活用をガマルニクとアルクスニスは主張したわけである。シベリアにおける飛行機工場建設の動きを見ればわかるとおり、ソ連全体の航空産業の整備は満洲事変が引き金となった。1931年12月16日政治局は、全ソ航空産業合同(ВАО=Всесоюзное объединение авиационной промышленности)を、ソ連ヴェセンハ(最高国民経済会議)幹部会に直属し、ヴェセンハ議長代理が統括する航空産業総局(ГУАП、四つのトラストから構成)に再編するとの国防小委の布告を承認した。そしてバラノフ<sup>(10)</sup>をそのヴェセンハ議長代理に承認した[РГАСПИ 17/3/865/3]。バラノフは労農赤軍の空軍長官(1924年12月～1931年6月)を務めた経歴の持ち主だったが、全ソ民間航空合同議長ゴリツマンと同時に、1933年の飛行機事故で死亡した。1932年初頭にヴェセンハは分割されるため、航空産業は重工業人民委員部に直属することになる。マラホフ(Малахов, Фёдор Сергеевич)は、その飛行機製造トラスト長を務めていた人物である。

### 3. ハバロフスクでの活動

イルクーツクから移動し、ハバロフスクに到達したガマルニクは、本格的な視察を開始する。活動は約3ヶ月にわたり、毎日のようにスターリンらモスクワの指導部に電報で情報を伝えることになる。この間、1月23日ガマルニクはヴォロシーロフに、「今日から約10日、ウラジオストック、ニコリリスク方面に出かけます」[РГВА 9/29/145/42]と連絡しており、ハバロフスクを離れて各



地も現地視察した。それを時系列的に並べていくのも一つの方法だが、ガマルニクが取り組んだ分野に分けて考察する方がわかりやすいのではないかと考える。以下、主な項目ごとに分けて考察する。

### 3.1. 鉄道・自動車による輸送、石炭採掘

1月12日のスターリン、ヴォロシーロフあて電報でガマルニクは、「党中央委員会の決定で5月1日までに極東で鉄道旅団が形成されねばならない。一方でザバイカル鉄道、ウスリー鉄道<sup>(11)</sup>長やキシキンはこのことについて何も知らない。旅団のための建設の展開について、ザバイカル、ウスリー鉄道に対し、交通人民委員部側が早急に指示を出すことが不可欠である」と打電した[РГВА 9/29/145/14]。従来の鉄道軍に加えて、鉄道軍特別軍団という新たな組織を形成することは1931年12月の政治局会議で決まり、その一部となる旅団を1932年5月1日までに極東地方で形成することを、ガマルニク不在の政治局が1932年1月13日に決めていた[寺山 2000a]。その前日の1月12日に、ガマルニクが輸送関係者への周知を図るべくハバロフスクから打電していたことになる。キシキンはこの時期ソ連交通人民委員代理(1931年10月14日~1933年7月19日)だった<sup>(12)</sup>。

1月15日、ガマルニクはスターリン、モロトフに「ウスリー、ザバイカル鉄道における石炭の状況を改善し、それらのチェレムホヴォ炭田への依存から脱却するため、極東とザバイカルにある炭田で増産するとともに、中東鉄道との協定を破棄することが全く必要である」と考える。この中東鉄道との協定破棄によってウスリー鉄道にはスーチャン炭田の石炭1日30貨車分が与えられることになり、スーチャン炭の高品質を考慮に入れると、現在受け取っているチェレムホヴォ炭田50貨車のうちおよそ40貨車分を代替することになるだろう。ベルガヴィノフ<sup>(13)</sup>、ブツェンコ<sup>(14)</sup>は特別な投資なしに1932年の極東地方における石炭採掘を計画以上に30万t増やすという私の提案を本日受け入れた。極東地方における石炭の顕著な増産のためには、すでに始められていたが中断している65kmのスーチャン支線の建設と、キヴダ炭田近くの新しいライチハ地区での作業の展開が不可欠だが、16kmのレールが足りない。ザバイカル鉄道の必要量のほぼ半分をカバーしているチェレムホヴォ炭田への依存脱却はより困難だ。そのためにはザバイカルのバクチャチ[Бакучач]にあるチェルノフスキー炭田その他で緊急の方策が必要だ。あなたの問い合わせに対して急いだ返事なので、現在私にはザバイカルでの増産に関する具体的な提案を持ち合わせていない」と打電した[РГВА 9/29/145/20]。これは1月13日に、スターリン、ヴォロシーロフがガマルニクに問い合わせた鉄道の石炭問題に対する回答であった[寺山 2020:38-39]。イルクーツクの西に位置するチェレムホヴォ炭田が、その東側に位置する鉄道路線が必要とする石炭の半分を負担しているという苦しい事情、動員のために極東地方における炭田の開発、それとの鉄道の接続が急務だったことが読み取れよう。

1ヶ月ほど経過した2月16日、ガマルニクはキシキんに「スーチャン支線建設強化に関するあなたの指示があるにもかかわらず、交通人民委員部からは今に至るまでこの支線の凍結という古

い決定に基づいた指示が依然として入ってきていると、ダリストロイ<sup>(15)</sup>が確言している。この支線を突撃[ударные、ソ連にとって最重要の対象につけられる名称で、人的・物的資源が集中投入された]建設のリストに加え、必要不可欠なすべてをそのために確保するよう、至急かつ絶対的にアンドレーエフ[Андреев, Андрей Андреевич、1895-1971、ソ連交通人民委員]に問題提起するようお願いする。あなたがとった方策について私に報告してほしい」と打電した[РГВА 9/29/145/67]。指導部の決定とその実行を担当する諸官庁の受け止め、その下部組織への指示の伝達状況、意思疎通がうまく行っていなかったことが読み取れる。

2月16日ガマルニクはヴォロシーロフに次の2点を打電した。鉄道ではなく自動車輸送が問題となる。

- ① 自動車輸送、国防建設の状況は非常に困難だ。自動車を至急運び込む必要がある。
- ② ウラジオストックのダリストロイの倉庫には、6月に発送する予定のコリマ遠征隊のためのビュッシング[ドイツの自動車製造会社 Büssing、貨物自動車・バスを製造]の貨物自動車15台が保管されている。ウラジオストック、ルースキー島の沿岸砲台の迅速な設置作業のためにこれらを引き渡すよう許可を願いたい。受け取った数の自動車は、軍事建設のために中央から運び込まれる自動車を受け取り次第返還する[РГВА 9/29/145/65]<sup>(16)</sup>。

これに続いて、2月23日にガマルニクはエゴーロフ(Егоров, Александр Ильич、1883-1939)労働赤軍参謀部長に、「あなたの nr69[文書に付された番号を意味する]について、デリバスを含め当地の組織にここでずいぶん圧力をかけたが、今では、自動車の一部を我々のところへ持つてくるよう、あなたがヤゴダ[Ягода, Генрих Григорьевич、1891-1938]と話をつけることが不可欠だと考える」と述べた[РГВА 9/29/145/72]。コリマはダリストロイの本拠地でとくに外貨獲得のための金採掘に強制労働が利用された土地として知られている。この2月16日と23日の電報からは、担当する仕事を完遂しようとする省庁間の争い(この場合はオゲペウと軍の間)が見て取れる。ヤゴダはオゲペウの議長代理、デリバス<sup>(17)</sup>はそのオゲペウ極東地方全権代表(1929年12月～1934年7月)かつ、特別赤旗極東軍オゲペウ特別部長を務めていた。ガマルニクとしてはオゲペウに掛け合い、軍のための自動車の確保に努めていたわけだが、このような輸送手段が極めて限られていたことも示している。

3月6日ガマルニクはヴォロシーロフに、「すでに全部で54台の蒸気機関車を受領したが、さらに20台受け取れると思う」と打電した[РГВА 9/29/145/89]<sup>(18)</sup>。中東鉄道を中国と共同経営していたソ連は1932年1月から2月にかけて、極東地方オゲペウ全権代表部外国部のエージェントの活動により、中東鉄道より西部の満洲里駅経由で36台、東部のボグラニチナヤ駅経由で27台の蒸気機関車をソ連領内に移動させることに成功していた[Шинин 2006: 159]。ガマルニクの電報はこれを意味している。

3月11日、ガマルニクはキシキンに、「トムスク、オムスク鉄道に極東向けの9000台の貨物車両が蓄積し、すべてはザバイカル鉄道の拙劣な仕事のために困難に陥っているとエイヘが私に知らせてきた。対策を講じるようお願いする」と打電した[РГВА 9/29/145/92]<sup>(19)</sup>。すでに膨大な数の貨車がシベリア鉄道上を埋め尽くしていたことがわかる。

3月14日、ガマルニクはスターリンに、「イルクーツクのキシキンが私に、交通人民委員部が病気を理由に彼をモスクワに召還していると知らせてきた。もし可能ならば、1ヶ月で構わないのでさらに彼を残してほしいが、不可能ならば、交通人民委員部の別の全権の派遣はキシキンの出発前に到着するようお願いする」と打電した[РГВА 9/29/145/93]<sup>(20)</sup>。シベリア鉄道における輸送問題で、ガマルニクがいかにキシキンに信頼を置いていたのかがわかる。

3月15日ガマルニクは、ソ連供給人民委員代理フロプリヤンキン(Хлопьянкин, Михаил Иванович, 1892-1938)、ラトチェンコ<sup>(21)</sup>と連名で、ソ連ソヴナルコム議長モロトフ、供給人民委員ミコヤン(Микоян, Анастас Иванович, 1895-1978)、ツェントロソユーズのゼレンスキー(Зеленский, Исаак Абрамович, 1890-1938)、交通人民委員アンドレーエフに暗号電報を打った。

すでに積み込まれた工業製品の移動は特におさまりに進んでいる。ツェントロソユーズのシステムのために積み込まれた商品が、一部は1931年のものから始まって鉄道につかえている。とくに、1931年の収穫促進活動[кампания]に予定されていた商品が到着しておらず、消費システムだけで正確な計算ではないが、それに加えてゴルト[Горт=городская организация розничной торговли 小売り取引都市組織]のデータによれば、倉出し価格[売り渡し価格]で1900万ルーブルの商品が道中にある。わかりやすくするために、ダリクライソユーズ[Далькрайсоюз=Союз дальневосточных кооператоров、極東地方協同組合員連盟]の組織だけで、荷下ろし期間の商品のリストを列挙してみよう：綿糸、靴、長靴、スカーフ、小間物は3月、4月、5月に12.6万ルーブル、6月、7月、8月に19.2万ルーブル、10月、11月、12月に197.3万ルーブル、1月、2月に350.6万ルーブルが荷下ろしの予定だった。ゴルトの組織でもこのような状況で、12月から1月にかけて総額490万ルーブル(このうち300万ルーブルが既製の繊維製品だった)が積み込まれたのに到着していない。その結果、市場からは完全に物がなくなり、商売の展開が抑えられ、莫大な需要が満たされず、建設作業展開のためにも、木材調達、金採掘、漁業その他の経済キャンペーン実行のための刺激を与える手段としても、莫大な需要が存在している。商組織の財政状況はきわめて深刻である。ダリクライポトレブソユーズ[Далькрайпотребсоюз 極東地方消費組合連合]には200万ルーブル、ゴルトには100万ルーブルが支払われていない。すでに積み込まれた物品の移動のため断固たる方策を願う[РГВА 9/29/145/100]。

鉄道の円滑な運行ができず、地元だけでなく各地から極東に集まる労働者にとっても必需品が手に入らないという窮状を訴えたものである。それらがなければ労働者の極東における労働意欲を

そぎ、当局が企図していた様々な事業の推進にも悪影響を及ぼすおそれがあった。

3月21日、ガマルニクはスターリンに「1ヶ月後にキシキンがモスクワに帰ってしまうが、ザバイカル鉄道とウスリー鉄道の一体化した活動のため、常駐の交通人民委員全権を任命する問題を中央委員会に提起することが不可欠であると考え。これらの鉄道の状況や、その国防的課題について開始された再建のため、両方の鉄道を機動的に指導する交通人民委員部の常駐全権の任命がまったく必要で、大きくはないが質の高いスタッフを彼につければ、2～3ヶ月の期間限定の全権を派遣するよりも多くの成果が得られると私は考える。もしも私の提案が採用されるのであれば、そのような役割を果たす適任者としてポストニコフ、またはアルノリドフを推薦する」と打電した[РГВА 9/29/145/119]<sup>(22)</sup>。ポストニコフ(Постников, Александр Михайлович, 1886-1937)はソ連革命軍事会議のメンバー(1927～1930年)のあと、ソ連交通人民委員代理を務めていた。アルノリドフの本名はシェインファイン(Шейнфайн(Арнольд), Арон Маркович, 1894-1937)だがこのとき、オクチャープリ鉄道長を務めていた。先に紹介した通り、ガマルニクの信頼篤かったキシキンはこの後、政治局が1932年4月1日、イルクーツクに設置するシベリア・極東鉄道総局長に任命することになり[寺山 2000b]、上記のガマルニクの提案をスターリンが考慮したものと考えてよいだろう。

4月15日、ガマルニクはモロトフ、アンドレーエフに打電した。「トムスク鉄道からザバイカル鉄道への4月の積み込みノルマを増やしてほしいとのジーミンの要請を支持する。労働国防会議の委員会が定めたノルマは実際に非常に困難で、東シベリア地方の主な建設を窮地に陥れている」と打電した[РГВА 9/29/145/159]<sup>(23)</sup>。

そのジーミンがどのような情報をもたらしたのか。日付は不明だが、次の電報は内容から判断するとおそらく4月14日か15日にジーミンが書いたものと思われる。

電話の筆記による。ハバロフスク。オゲペウ全権代表部経由、軍参謀部ブリュッヘル[Блюхер, Василий Константинович, 1890-1938、特別赤旗極東軍司令官]、ガマルニク宛。4日前、モロトフ、アンドレーエフあてに私が送った覚書のコピーを送る。返事はないが、この方策のきわめて深刻な結果を、東シベリア地方はすでに痛切に感じている。トムスク鉄道からザバイカル鉄道への積み込みノルマを再検討するようにとの我々の要請を支持するよう切に願う：シベリアの建設組立班長[НРとあるが、начальник работの略とみなした。次のУНРについても参照のこと]の報告によれば、労働国防会議の委員会は4月、トムスク鉄道管内より、ザバイカル鉄道向けに、最低限必要として申請された貨車9477台の代わりに、貨車5344台の積み込みノルマを承認したが、これによって地方の経済生活は完全に麻痺し、最重要の建設が破綻に瀕している。特に木材は無蓋貨車1435台、有蓋貨車80台の代わりにわずか100台しか積み込みノルマが設定されず、第1017建設組立局[УНРとあり、управление начальника работのことだと判断した。これはстроительно-монтажное управлениеの別称で建設組立作業に従事していた]、第70建設組立局、特別赤旗極東軍の第48建設組

立局、飛行機修理工場、No. 125 工場〔イルクーツク飛行機工場のこと〕の建設、自動車修理工場、バイカルストロイ、ヴォストクゾーロト〔東方金産業〕の浚渫工場の特別建設が崩壊している。トムスク鉄道沿線地区ではすべてが木材を受け取り、輸出にも回されている。石炭は輸送だけで貨車 5000 台以上の需要があるにもかかわらず、貨車 6728 台の申請の代わりに、4026 台だけが許され、地元の工業に石炭が与えられないため製造が停止している。穀物は貨車 828 台の要請に対して 660 台だけで、基本的な受領者への供給不足が生じ、ザバイカルの製粉所の停止をもたらしている。セメントを含む建設資材については貨車 228 台の要請に対しゼロ解答で、建設の展開は不可能になった。トムスク鉄道に対し、列挙した最低限の数の貨車を 4 月にザバイカルあてに積み込むことを義務付けるようお願いする〔РГВА 9/29/145/160-162〕。

輸送問題について筆者はすでにいくつかの論考を発表してきたが、その決定の背景にはここに述べたような現地における混乱があったことを理解できよう。

### 3.2. 造船所の建設

1932 年 4 月に極東海軍が復活するが、軍艦だけでなく民間の船舶も輸送や動員面で重要な役割を果たすことを求められ、造船工場や船舶の修理工場も注目されることになった。

1932 年 1 月 13 日にガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに、次のように打電した。

オシポフ修理所と将来の造船工場建設地を訪問した。両者は憤慨すべき状況に置かれ、ソユーズヴェルフィ〔Союзверфь=Всесоюзная контора по проектированию судоверфей и судоремонтных предприятий、造船所設計・船舶修理企業全ソ事務所〕は今に至るまでここで何もしていない。オシポフ修理所では軍用備蓄倉庫の解放に関する軍部の活動だけが行われており、ソユーズヴェルフィはここに人も派遣してなければ、いまだに建設にかんする指示も何ら出していない。ヴォロネシ村にある将来の工場の敷地には、約 30 人のためのバラックが建てられたが、建設指導者ゲンドリン〔Гендлин〕はソユーズヴェルフィの招きでモスクワへ長期の出張に出かけていない。このような状況にあるため、私はソユーズヴェルフィの代表たちの来訪を待たずに、オシポフ修理所と新工場の建設者の住居をデリバスに委ねたが、彼は明日ウロン〔Улон=Управление лагерей особого назначения、特殊任務ラーゲリ局〕の力を借りてこの問題に取りかかる予定だ。ソユーズヴェルフィにはデリバスの仕事のために 50 万ルーブルの前金をすぐに送らせてほしい。ソユーズヴェルフィがオシポフ修理所に早急に設備を送り始めること、軍部が解放した倉庫の敷地でその組み立てを始めることが不可欠である。オシポフ修理所でも新工場にとっても指導的専門家を至急派遣することが必要だ。当地に不可欠な技師グループを派遣し、ハバロフスクに工場の設計を移転してはどうだろうか。作業を著しく早めると私は考えている〔РГВА 9/29/145/15〕。

この電報は、デリバスが囚人労働を使って住宅建設に着手することを意味している。またこのウロンについて、日付は不明(ファイルには2月10日前後に発出された電報と並べられている)だが、ガマルニクはスターリンに「極東地方にはクラーク[富農]のスペツペレセレンツィ〔спеппереселенцы、1920年代末のスターリンによる富農絶滅策により、域内或いは域外へ追放された富農たち。実際には富農に限定されない農民が多数含まれていた〕が4万2000人おり、そのうち成人男性は約1万8000人だ。ウロンには2万人いる。クラークの村落とウロンのラーゲリ〔収容所〕の配置はまったく許し難い：①クラーク村は鉄道や軍事的に重要な地点の近くに存在し、ニコラエフスク・ナ・アムール地区の村もある。②ウロンのラーゲリは大部分がウラジオストック地区や沿岸の入り江にある。状況と関連して我々に対する彼らの敵対的な活動が強まっている。最も活発な危険分子をラーゲリや特殊村落〔スペツペレセレンツィの居住する村落のこと〕から徹底的に排除することについて私はすでにデリバスに指示したが、このほかにも沿岸や軍事的に重要な地点から、特殊村落やラーゲリを遠くへ移すことが非常に重要だと考える。これを今やることによって漁業、林業、金産業に何らかの損害が及ぶことになっても、是非やらなければならないことだ。至急あなたの指示を仰ぎたい。あらかじめ移転に向けた初期の作業は行うつもりだ〕〔РГВА 9/29/145/56 и об.〕と打電した。当局によって弾圧された人々が反体制的な感情を抱いていること、そのような分子が重要な施設に隣接して生活し、破壊活動を行うことを危惧していたことがわかる。ウロンという特殊な場所に限らず、ウラジオストック市内でも当局が予防拘禁的に住民を逮捕、追放することが行われていた〔寺山2021：13-16〕。

2月19日、ガマルニク、ブリュッヘル、ムクレーヴィチ(Муклевич, Ромуальд Адамович、1890-1938、労農赤軍海軍監察官)の3名は連名でヴォロシーロフに打電した。

第一：インスタンツィア〔政治局或いはスターリンを中心とする指導部のこと〕の布告実行のため、我々は地図、手元にある材料、アムール川下流に詳しい専門家の報告をもとに、現地での視察のため、造船工場建設の可能な土地を次のように列挙した：1. ボロニ湖地区、2. フンガリイ、3. ペルムスコエ村、4. スレドネ・タンボフ＝アンディ地区〔アンディはスレドネ・タンボフの対岸〕。アムール小艦隊司令官イサコフ〔隊長〕、アムール汽船副代表モロゾフ(アムール川に非常に詳しい旧来からの住民)、ソユーズヴェルフィ建設技師クルグロフ、それに技術職員のグループからなる我々が派遣した探検隊は、上述した地点を視察し、アムール川左岸のペルムスコエ村を、造船工場建設の完全な適地として選んだ。ガマルニク、ムクレーヴィチ、ベルガヴィノフ、クフタ〔おそらく1931年に黒海造船工場長を務めていたМ. Кухтаのことではないかと思われる。詳しくは不明〕とその技師長ゴインキス<sup>(24)</sup>は、ペルムスコエを訪れ工場の敷地を実地検分し、適地だと確認した。あなた方が指示した場所においては、工場建設にとって、そしてまた利用にとっても最も困難なのは輸送問題である。アムール川が航行できるのは年平均155日だけであり、河岸沿いの道路はハバロフスクからヴァーツコエ村までしかなく、その先は沼沢地が広がり、いくつもの流れが入り込んで道路がない。

氷結していない場所の存在、頻繁な吹雪が原因で、氷上を自動車が定期的に移動するのはきわめて困難だし、このことは身をもって確信した。1 日半かけてイノケンティエフスコエまで自動車であどりに着いたが、その後はペルムスコエに行くために飛行機を呼ばねばならなかったからである。したがって、建設と工場での作業に不可欠なものすべてを航行可能時に適切に運び込めるよう、河川の船団(タグボートと平底舟)の創設に最大限急いで着手すべきである。将来的には鉄道の問題も起きてくるだろう。第二：バラノフ、ナウモフの要請にしたがい、水上飛行機工場の適地選択のため、特別赤旗極東軍の航空部隊長を筆頭にグループが派遣されたが、彼らはいくつかの地点を検分し、適地としてペルムスコエから下流 10 km の地点を挙げた。この場所はガマルニク、ムクレヴィチ、ベルガヴィノフもまた検分し適地であると認めている[РГВА 9/29/145/68]<sup>(25)</sup>。

イノケンティエフスコエからペルムスコエまで約 80 km であり、適地探索の困難な状況がうかがえる報告である。

日付は不明だが、おそらくこの説明に続くものと思われる。ガマルニクはヴォロシーロフに、「新しい場所における造船工場の総合プラン作成のため、シターゲル、ロマノフを筆頭に、ソユーズヴェルフィの設計グループを早急にハバロフスクに派遣してほしい」[РГВА 9/29/145/71]と打電した。シターゲル(Штагер В. В.)の経歴はよくわからないが、ソユーズヴェルフィ支配人コンドラチェフが 1931 年 12 月 14 日に、ソ連ヴェセンハに軍艦建設についての報告を提出した際に、ソユーズヴェルフィ大規模建設セクター長代理として名前が出ている[Сорокина 2008 : 588-591]。後述するが、このシターゲル、ロマノフ<sup>(26)</sup>、コンドラチェフらを含むメンバーが、1931 年 12 月 28 日にスターリンの執務室に入っている。入退室時間(入室 21 時、退室 22 時 35 分)が同じなので用件が同じだと考えられる。メンバーはこの他にラーザリの兄で 1932 年からは重工業人民委員代理となる М. カガノーヴィチ(Каганович, Михаил Моисеевич, 1888-1941)、ゴルブーノフ<sup>(27)</sup>、クフタ、コステンコ(後述)、パヴルノフスキー<sup>(28)</sup>、スターヴェル(Ставер、詳しい経歴は不明)、シュルギン<sup>(29)</sup>、トゥハチェフスキー、Л. カガノーヴィチ(彼だけはすでに入室していたオルジョニキツゼと 20 分居残った)であった[Черноваев 2008:55]。この場にガマルニクはいなかったが、彼のモスクワ出発の直前に、造船所建設について指導的人物たちが集まって話し合っていたことがわかる。スターヴェル、シュルギン、クフタにとっては記録の上では、これが唯一のスターリンとの面会だった。

2 月 25 日、ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフ、オルジョニキツゼ(Орджоникидзе, Серго Константинович, 1886-1937、1932 年初頭から重工業人民委員)に打電した。

造船所の建設作業に大々的に取り組み始めた：地質学調査班を派遣し、1500 人の労働者を投入し、木挽き機械 4 台を投入し、「[一語不明]」製材企業の建設に着手し、馬車輸送を組織し、諸企業の負担で自動車やトラクターを割り当て、ペルムスコエ村で電信や無線を設置し、

軍の負担で厨房車を複数有する野外製パン所を割り当て、ベルムスコエで給食施設、医療サービスを組織する等である。すべてを動員し、地方の資源を最大限活用しながら、最も突撃的なテンポで作業を展開しているが、同時に労働人民委員部がスドストロイ〔Судострой、造船トラス〕の申請に突撃的に応じ、交通人民委員部がスドストロイの物資を特に猛スピードで運び込むことが必要だ。カッテリ〔Каттель, Иосиф Абрамович, 1894-1982〕同志は本日、オルジョニキゼに詳細な申請書を打電した。基本的なのは、①航行開始まで、すなわち7月1日までには適時に、少なくとも20隻のタグボート〔一語不明〕を中央から移す必要がある。アムール川では全部で14隻が漁業、金産業、木材業その他の需要に困難を抱えながら従事している。それでも我々はこのうちの7隻をスドストロイのために予約することを決めた（建設に平底船は着手したが、いまのところ緩慢である）。②労働者を適時に輸送し、特別リストに基づく供給に彼らを登録すること。③ゴリツマンは、少なくとも旅客機2機を至急派遣すること。飛行機工場に関する作業には〔最後の部分が判読できない〕〔РГВА 9/29/145/75〕<sup>(30)</sup>。

その後、1ヶ月以上この問題についての情報は途切れたが、4月4日にガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフ、オルジョニキゼに長文の電報を送った。

ムクレーヴィチ、プリュッヘル、ベルガヴィノフ、プツェンコ、イサコフ、クフタ、ゴインキス、カッテリが出席するなかで、ベルムスコエ村から戻ってきたオクスマン、コステンコ<sup>(31)</sup>、ロマノフの報告を聞いた。彼らの考えでは多くの土木的、水力技術的な作業が必要な工場の建設にはベルムスコエの敷地は不適切で、建設費はヴォロネシ村〔ハバロフスク近郊〕で工場を建設する費用よりも80~100%高く、あなた方が定めた期間よりも建設に1年長くかかると考えている。ベルムスコエ案の技術的困難に関するコステンコの計算に対して多くの反論、疑念がムクレーヴィチ、カッテリ、イサコフ、ゴインキスから寄せられたが、残念ながら当地にはコステンコの技術的試算すべてを説得的かつ綿密に点検できるような造船の有力な専門家はいない。造船所を作るのにベルムスコエがヴォロネシよりも、技術的・経済的にもより困難で、より高くつく場所であることは疑いないのだが、事前の探索と我々の現地での検分から判断すると、あなた方が指定した地区においてベルムスコエはもっとも適した場所であると思えし、今も思っている。報告した通り、我々とベルムスコエ村に行き、適地だと認めたのはクフタ、ゴインキスであり、この点に関する彼らの書面は手元にある。私を含め数人の同志には、オクスマン、コステンコはベルムスコエ村開発の技術的困難を意識的に過大評価し、ハバロフスク近郊の工場建設がより容易で安価だとして、ベルムスコエ案については検討したくないように思える。私が開いた協議会で私は彼らに直接、この疑念を激しく投げかけた。モスクワからやってきた時からすでに、彼らはこのような考えを抱いていたが、2月9日に受け取ったあなた方の命令に厳格にしたがい、私は当地で、誰である



うとヴォロネシ案を取り上げることを絶対的に禁止したし、禁止するつもりだ。

2月9日のあなた方の命令受領後、ヴォロネシ案却下に極東地方の同志たちやブリュッヘルが反対を試みたが、ブリュッヘルは、ハバロフスクは頼りになる地点なので、国境に近いからという理由でヴォロネシから工場を移すことに同意しなかったのである。繰り返すが、2月9日付のあなた方の命令は最終決定として出されたのだと言って、私はこれらの議論をすべて完全に遮断したのだ。ヴォロネシ案に私が聞く耳を持たないとわかると、オクスマン、コステンコはアムール右岸、ペルムスコエ村の北 95 km のニジネ・タンボフ村での工場建設というもう一つの案を出してきたが、そこは偶然彼らが飛行機で降り立ったところで1日いただけであった。彼らはニジネ・タンボフの敷地は技術的に好ましく、ヴォロネシ案よりも少しだけ高くつくだけで、建設期間はあなた方の設定したのよりも1年長くなると考えている。ニジネ・タンボフは、2月9日の命令を遂行する際に我々が検討した地区には含まれていなかったのだから、我々も視察していない。報告のためオクスマン、コステンコは2日後にモスクワに向けて出発する。工場の敷地問題は未解決のままであり、オクスマン、コステンコが最終設計案を提出するのは10月になると発言したので、精力的に作業を展開しているカッターにとっては大きな困難が生じ、工場建設期間が狂う恐れも出てきている。したがってオクスマン、コステンコ及び4月6日に当地を出発するムクレーヴィチが到着し次第すぐに、彼らの意見を聞き、航行の時間を1日も無駄にしないよう、工場の場所について最終決定を出してほしい。あなた方の早急な指示を御願ひする [ПГБА 9/29/145/142-143]<sup>(32)</sup>。

4月5日ガマルニクは、スターリン、モロトフ、ヴォロシーロフ、オルジョニキツェに「オルジョニキツェに渡された造船に関するあなた方の指示を、今受け取った。ニジネ・タンボフの敷地は右岸にあるため、候補からは落ちる。ペルムスコエでの仕事に目標を定め、ここでの探索作業を組織している。カッターは精力的な仕事人で、水運が開かれると同時に速いテンポで建設を展開するだろう。問題は設計で、プロジェクトビューローには可能な限り迅速にソユーズヴェルフィに設計図を引き渡させねばならない」と打電した [ПГБА 9/29/145/183]。

4月8日ガマルニクはヴォロシーロフに「現場で指揮を執るため、造船所工場建設の第2段階のためのインスタツィアの最終課題をお知らせください」と打電し [ПГБА 9/29/145/185]、翌4月9日にガマルニクは、カッター、クフタ、オクスマンとの連名で重工業人民委員オルジョニキツェに打電した。

ペルムスコエ村の敷地に最終的に落ち着いた。13日にプロジェクトヴェルフィ [проект-верфь 船舶の設計にあたる] は、当地で予備的な総合プランを建設当局に提出する予定だ。そこには補助的な作業場、木材伐採・製材工場、野外用ストーブ等の臨時の建物にあてられる建設地や労働者村の場所が示される。補助的作業場となる臨時施設のバラック建設の開始を5月1日、基礎的な諸工場の建設を6月15日、設備の組み立てを10月から1933年3月と想定

している実行プランが定まっている。まれに見る困難をものともせず、政府決定で指示された期間内の建設、組み立て、工場の稼働の実行に向けて断固たる方策をとっている。要求に基づいて割り当てられたあらゆる建設資材や建設機械が軍用列車の速さで至急運び込まれ、1000 kw の臨時発電所、加工木材 1 万 6000 m<sup>3</sup> の能力を有する製材工場が存在するという条件でのみ期限内の仕事の遂行は可能である。国産だけでなく輸入されたあらゆる工場設備を、10 月までの現在の航行期間内に完全に送り届けることが必要である（第 1 段階の建設が完全に可能となる量の中央からのすべての建設資材、及び作業場の活動開始に必要な工業製品の一部も同様に送付が必要である）。改めて浚漕船の早急な購入と輸送を御願います。水運人民委員部の組織を通じて少なくとも 15 隻のタグボートを投入することが絶対不可欠である。建設には水上飛行機〔гидроплан〕2 機、ハイドロプレーン〔глиссер〕2 機が不可欠だ。毎日建設現場には数百人の労働者が到着している。大テント 500 張を現場まで送るよう切に願う。幹部を適時に養成し、早期に建設開始期の生産を円滑に進めるべく、工場長の任命を急いでほしい。2 日後に建設工程表を受け取る予定で、あなたに連絡するつもりだ〔РГВА 9/29/145/146 и об.〕<sup>(33)</sup>。

4 月 10 日ガマルニクは、ベルガヴィノフ、ブリュッヘル、カッターリとの連名でスターリンに「造船工場についてのあなたの電報を受領した。最終的にペルムスコエ村に落ち着いた。オルジョニキツェの電報に対して本日返信するつもりだ。建設に必要なすべてを実行すること、あらゆる困難を克服しペルムスコエ村で期限内に建設することを我々はあなたに約束する」と打電した〔РГВА 9/29/145/188〕。「あなたの電報」とは、4 月 6 日にスターリンがハバロフスクに送った電報のことを指しており、ハバロフスク近郊ではなく奥地に工場の建設を求めるものだった〔寺山 2020〕。上記の 4 月 8 日の電報をガマルニクが送った際には、この 4 月 6 日のスターリンの電報を見ていなかった可能性がある。このような過程を経て、ガマルニクの極東滞在の最終段階で、後にコムソモリスク・ナ・アムールとなる場所に造船工場を建設することが最終的に決まった。最終決定に至るまで、建造地への反対も予想外に多かったことを確認できたと思う。

### 3.3. 発電、セメント工場、軍需工場、木材調達、労働者確保、強制労働の利用

次にまとめるのは発電や諸工場の活動と労働者の確保に関するガマルニクの活動である。1932 年 1 月 14 日、ガマルニクはスターリン、モロトフに「ハバロフスクにおける電気エネルギーの状況は実際に破滅的である。5000～6000 kw の上記タービンか、各々 1200 馬力のディーゼル発電機 3 基を至急ハバロフスクに与える必要がある」〔РГВА 9/29/145/16〕と伝えた。

同じく 1 月 14 日、ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに「スパスク・セメント工場の 1932 年の現行のプログラムは 26 万 8000 ボーチカ〔1 ボーチカは約 492 リットル〕だが、ベルガヴィノフ、プツェンコとはこれを 30 万ボーチカに増やすことで合意した。軍部の 1932 年の建設計画だけで、おおよその数字だが 60 万ボーチカが必要だ。すでに 1931 年にスパスクで始

まった新しいセメント工場の建設を早急に突撃的に高めることが必要だ。新工場は年産 200 万ポーチカを想定し、その建設にはすでに 250 万ルーブルが投資され、労働者や技術要員は確保されている。現在ツェメントストロイ〔Цементстрой、セメント工場建設に従事〕は建設の凍結を提案したが、私は作業の続行を提案した。迅速に設備を投入すれば 7 月 15 日までに、年産 75 万ポーチカの生産性を有する工場の第 1 段階を完了することが可能だ。他の工場の設備を撤収してでもスパスクに設備を急いで運び込み、7 月 15 日までに第 1 段階の作業を終えるようツェメントストロイに指示してほしい。高品質のスパスクのセメントは国防建設に完全に適合的だと報告する」と打電した〔РГВА 9/29/145/17〕。

ハンカ湖に近いスパスク・ダーリニーには帝政時代にもセメント工場が作られていた。石灰岩、粘土が豊富な土地だったためである。この提案を受けて 1 月 16 日に、スターリンが政治局で報告し、年産 75 万ポーチカのセメント工場を建設するようオルジョニキツェに促すに至った〔寺山 2020 : 40〕。

次いで 1 月 21 日、ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに、「〔極東〕地方の諸工場を視察し、それぞれにとっての動員課題を確定すべく 2 月 5 日に作業を終えることにして、地方に職員の特別グループを派遣した。ハバロフスクの元兵器廠ダリセリマシに対して我々は、火炮 300 門、弾薬車〔зарядники = зарядные ящики〕250 台、砲車〔орудийное колесо〕2500 台、戦車 300 台を 1 年目の動員課題として与えた。現在工場に対しては、統制注文〔контрольный заказ、翌年以降を見据えた、受注目標のことか〕が渡されている。工場は基本的にこのプログラムのために必要な熟練労働者や技術的指導者が確保されている。数は多くないが不可欠な追加設備の申請書をエゴーロフに送った」と打電した〔РГВА 9/29/145/37〕。

日付が不明だが、ハバロフスクから視察に出かけた間に出されたものと思われる。ガマルニクはスターリンに「ベニヤ版工場を訪問した。1931 年の 6500 m<sup>3</sup> という輸出プログラムは実際には 2800 m<sup>3</sup> に終わった。1932 年には 7560 m<sup>3</sup> の輸出予定である。昨年の失敗と現在の工場の作業の不調は、主としてダリレス〔Дальлес〕が工場にしばしば原料を供給しないためである。工場には燃料も確保されておらず、労働者に対する食糧供給も悪い。これらの問題すべてについて地方党委に圧力をかけるつもりだ。工場長は私に、新しい乾燥機(これらの輸入が必要だとまで言っているようだが)が 2 台あれば、輸出プログラムを 1 万 2000 m<sup>3</sup> まで増大することが可能だと述べた」と打電した〔РГВА 9/29/145/45〕<sup>(34)</sup>。

これも日付は不明だが、1932 年 2 月末から 3 月にかけてガマルニクはオルジョニキツェに、「①ベルガヴィノフとクルトフ〔Крутов, Григорий Максимович, 1894-1938、極東地方ソヴィエト執行委員会議長〕は 2 月 23 日の電報で、新たに受け取った 6000 kw の輸入タービンをウラジオストックで 4 月に稼働させるため、不足している不可欠な器材をあなたに頼んだ。ウラジオストックの電気エネルギーの状態が現在きわめて深刻なのは、現地において個人的に断言できるので、この要請に答えてくれるよう切に願う。工業、特にアルチヨム〔炭田〕にとってエネルギーが不足し、街灯はなく、住民のかなりの部分は明りなしに座っており、夕方から町は闇に包まれている。②

6000 kw の新タービンの稼働でウラジオストックの状況は顕著に改善するだろうが、ウラジオストック地区の工業発展、特に石炭業のため電気エネルギー問題の根本的解決はアルチョム国営地区発電所〔Арте́мгэс〕の建設である。私はアルチョム国営地区発電所に行ってみたが、その建設は緩慢で、第1段階を1933年4月1日に想定している。1932年末に1万2000 kw の第1段階の稼働が全く不可欠で、完全に可能だと考える。この二つの問題についてあなたの決定を私に知らせしてほしい〔РГВА 9/29/145/54〕と打電した。

3月24日にガマルニクはバジレヴィチ<sup>(35)</sup>に「キャタピラ・トラクターは機械トラクターステーションか、ダリレスプロム〔Дальлеспром〕のところにしかない。これらの組織からそれらを取り上げることは、最重要の経済活動に打撃を与えることを意味する。トラクターは中央から運び込むことが必要だ」と打電した〔РГВА 9/29/145/123〕<sup>(36)</sup>。同じバジレヴィチ宛てだが4月2日、ガマルニクは「もしも中央で乞食たちをどうやっても絶対に受け取れないのであれば、彼らなしに道路部隊を積み込んでください。他のきわめて重要な課題の多くは〔乞食がいなければ〕破滅してしまうが、何とかして部隊の活動を保証したい」と打電した〔РГВА 9/29/145/141〕<sup>(37)</sup>。注目すべきは乞食（шмоль = 古語で шмольники, попрошайка, нищий, бродяги と同じ意味）という言葉を使っていることである。様々な汚れ仕事を押し付ける要員、社会の底辺にいる人々というニュアンスを感じるが、おそらくは中央（モスクワを中心とするロシア中央部）でかき集められなかったか、オゲペウの許可が下りなかったかしたため、極東で何とかして集めるということだろうか。

### 3.4. 塩の確保

塩は食料の貯蔵に不可欠で、スターリン指導部は極東地方における塩の確保も最重要の課題として設定していた。1月14日、スターリンに対してガマルニクは、「1日だけのイルクーツク滞在では東シベリアの塩の問題を詳細に明らかにできなかったが、イルクーツクの同志の言葉によって初めて、きつく締めあげれば、昨年の2万6000 tの代わりに15万 tまで増産できるとわかった。しかしこのような計画に向けた準備はわずかしかなされてない。10万 tまでの塩の増産と低価格化には採掘場を開発する必要がある。極東に関してはベルガヴィノフが私に提示したデータは明らかに不十分なため、彼には中央委員会への返答を3日間控え、ウラジオストックから専門家を招くよう提案した（より綿密に解明するため）。問題が明らかになれば自身の提案を報告するつもりだ」と打電した〔РГВА 9/29/145/18〕。この電報を受け、1月16日の政治局会議ではスターリン自らが報告し、金に糸目をつけず東シベリア、ウラジオストックで塩を生産するよう決議していた〔寺山2020：40〕。

その5日後の1月21日、ガマルニクはベルガヴィノフと連名でスターリンに、塩の獲得について次の4点を報告した。全文引用する。

- ① ウラジオストック近くのタリミ〔Тальми〕湖〔北朝鮮との国境に近いハサン地区にある湖で現在はプティチエ Птичьё 湖と呼ばれる。36平方キロメートル〕を凍らせて水分を抜

く方法で塩を獲得すべく、本年工場建設は終了し、1932 年末には 5000 t の塩の生産量を持つことになるだろうが、この数字を増やす方策をとる予定だ。現地の専門家はボーリングでタリミ地区の岩塩を検査するよう提言しており、工作機械「クレリウス AB400m」[スウェーデンの工作機械会社クレリウスの試錐機]を至急送ることが必要である。

- ② ウラジオストック近くのウグロヴォイ湾[ウラジオストックの北方、アムール湾のさらに内海]を同じく凍らせる方法で 1933 年末には年産 6~8 万 t の塩を採取することが可能で、その後 15 万 t まで増やせる。このためには 500 万ルーブルをかけて囲い堰を設けて、水力工学的工事を行う必要がある。ソユーズソーリ[《Союзсоль》 Всесоюзное объединение соляной промышленности、塩業全ソ合同]には資金を提供し、塩トラストの指導者となる熟練職人や塩採掘、水力工学の専門家も派遣してウグロヴォイ湾の事業を展開させてほしい。
- ③ 8~10 度の塩を含んだ粘土が存在するシチャースチエ湾[アムール川河口の北部、オホーツク海に面している]、イスカ川のある地区に重点を置きつつ、北部沿岸での岩塩の探索作業に着手している。この探索には中央から工作機械「クレリウス AB400m」を 2 台至急投入する必要がある、遅くとも 4 月までには運び込むよう要請する。手動の工作機械は、探索地点に近いサハリンから取り寄せる。これらの探索に 1932 年には 60 万ルーブルが必要である。
- ④ 海水を蒸発させて 1933 年初めに 2 万 t の塩を獲得できる真空装置をウラジオストックに送ってほしい。その機械とともに専門家の出張も必要である。真空装置は脱塩装置とともにウラジオストックと海上輸送に夏に真水を供給することを可能にする[РГВА 9/29/145/39, 44]。

その後の経過が不明だが、様々な手段によって塩の確保に取り組んでいたことが明らかである。

### 3.5. 航空部隊、航空機製造、民間航空、飛行場、ガソリタンク建設

航空部隊の充実のみならず、中央から遠く広大な極東地方にあっては中央との連絡、地域間の連絡のための民間航空の活用、飛行機製造、飛行場の整備等がきわめて重要な課題となる。既述の通り、ガマルニクが通過してきたノヴォシビルスク、イルクーツクでも飛行機工場の建設は問題になっていた。1 月 16 日ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに打電した。「バラノフには、民間航空と航空部隊の飛行機、エンジン修理のため、年に 400 機(100 機の TB-3、50 機の P-6、100 機の P-5、150 機の И-5)の飛行機、1000 台の航空エンジン(800 台の M-17 と M-34)を修理するという動員課題を持った飛行機修理工場を 1932 年にハバロフスクに建設、整備させるべきだと私とアルクスニス考える。平時にこの工場は飛行機修理の他に、自動車の修理、小系列の飛行機生産に従事できる。新しい民間飛行場にこの修理工場を建設できる。1 km

四方の飛行場の建設は終わろうとしている」[РГВА 9/29/145/25]と打電した。

1月17日にガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに電報を打ち、全ソ民間航空合同議長ゴリツマンが実行すべきこととして、次のように列挙した。全文引用する。

- ① 1932年5月にイルクーツク・ハバロフスク・ウラジオストックの航空路線を開設すること。そこでアント9[АНТ-9、9人乗り旅客機]を10機、スターリ2[Сталь 2、4人乗り旅客機]を5機運用すること。
- ② 遅くとも1932年7月までにヴェルフネウディンスク、カルイムスコエ、ネルチンスク、モゴチャ、ポリショイ・ネヴェル、トゥインダ、スヴァボードヌイ、アルハラ、ティホニカヤ、ラゾ、オゼルヌイエ・クリュチで1km四方以上の規模で、飛行場の作業空間を確保し、それぞれに75tの航空燃料用のガソリタンクを整備すること。
- ③ 1932年5月に、少なくとも5機の飛行機を使って、ハバロフスク～ニコラエフスク・ナ・アムール路線の通常運行を組織すること。同時にアムール川沿いに、水上飛行艇を使ってハバロフスクからニコラエフスクまで定期的な郵便・旅客連絡を組織すること。
- ④ 1932年中に、サハリン周回路線を飛ぶ飛行機の数に6機まで増やすこと。
- ⑤ ニコラエフスク・ナ・アムールからペトロパヴロフスクまでの東カムチャツカ路線を1932年に開設し、6機以上の飛行機を運用すること[РГВА 9/29/145/23 и об.]。

以上である。広大な極東地方の相互連絡には鉄道、船舶に加え、当然飛行機が重要であると考へ、民間航空機関にその整備を委ねた。軍のNo.2ガマルニクがこのように提言しており、民間航空を戦時には軍の補助機関として活用することを当然視している。②に列挙された飛行場は鉄道路線に沿って位置していることを確認できる。

同じ1月17日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「現地で綿密に状況を精査したのち、モスクワでなされた事前の構想に対して、特別赤旗極東軍の航空部隊について1932年に次のような追加的強化策を実行することが不可欠だと私とアルクスニスと考えている」と述べ、二点を列挙した。

- ① チタの第26軽爆撃飛行中隊、スパスクの第40中隊を、19機から通常の定員28機の現役飛行機からなる部隊に拡大すること。
- ② 都市、特にアムール鉄橋、造船工場、重旅団[тяжелая бригада]を防衛するため15機からなる戦闘機部隊1個をハバロフスクに形成すること[РГВА 9/29/145/24]。

1月22日、ガマルニクはエゴロフに、「ゴリツマンには現在稼働中の悪くない工場を基盤に、イルクーツクで工場を展開するよう委ねることが不可欠だと思う。ハバロフスクにはゴリツマンのところには実質的に何も無い。ハバロフスクの工場はより強力であるべきなので、この問題は

バラノフに委ねる方が良いだろう。ハバロフスクの工場の動員課題は、1932～33年の航空の発展プランから算定される」[РГВА 9/29/145/41]<sup>(38)</sup>。

その後、航空分野に関するガマルニクの電報記録は見い出せない。3月11日、ガマルニクはレヴィチェフ参謀長代理<sup>(39)</sup>に、次のように打電した。

- ① 飛行機工場のために、いつ、どの建設資材、機械装置が積み込まれ、積み込まれつつあるのかバラノフに聞いて明らかにしてください。木材とレンガ以外、彼は現地で何も受け取ることはないと言われし。到着した飛行機工場長から、バラノフがとった対策について私は何も知ることができなかった。なぜなら彼自身何も知らず、建設所長を待っているからだ。数台の貨物自動車、釘、ガラス、建設に必要なすべてを早く積み込み、鉄道で早く移動できるよう、バラノフに強く圧力をかけられたし。もしも彼が素早くこれに取り組まなければ、今年の作業は破綻するだろう。
- ② ダリセリマシに関する問題でマルティノヴィチ<sup>(40)</sup>が派遣したモスクワの小委員会の話を昨日聞いた。ドロズドフ[Дроздов]の資料を通して私とあなたが知っていたことに付け加えるものは何もなかった。私は工場のための工作機械を待っていたのだが、説明するために小委がやってきて、もう1本の電報をモスクワに打つだけだった。仕事ではなく、官僚的な大騒ぎに終わった。ダリセリマシの問題についてパヴルノフスキー、マルティノヴィチに圧力をかけられたし[РГВА 9/29/145/90]<sup>(41)</sup>。

4月8日ガマルニクはモスクワのレヴィチェフに「来訪して私と話したゾロタレフも、彼よりも前に来訪した工場長もいつ、何が運ばれてくるのか知らないし、確定した課題を持っていない。あなたが約束したバラノフの電報を私はいまだに受け取っていない。バラノフがこの工場建設に然るべき注意を払っていないのではないかと私は確信するようになった。私は工場建設を全力で支えるし、特別赤旗極東軍の革命軍事会議も支援するだろうが、バラノフが精力的に活動しなければ物事は進まないだろう。この問題を人民委員[ヴォロシーロフ]に報告し、バラノフと話されたし」と打電した[РГВА 9/29/145/187]。

他の史料で補強する必要があるが、航空関連の史料からは作業が捗っていないこと、その担当者に対するガマルニクの不満が読み取れよう。これより少し前の4月3日に政治局は、①ハバロフスク地区における修理工場建設のため、工作機械、設備、道具輸入のために、民間航空総局長ゴリツマンの管理下に1600万ルーブルと1万ドルを補助すること、外務人民委員部はイタリアで飛行機6機(予備エンジンを100%つけて)を注文すること、民間航空総局はこれらの飛行機で沿海路線をすぐに開設すること、②民間航空総局は2万ルーブルで米国から特別の電気溶接具を取り寄せることを許可する、以上を決めた[РГАСПИ 17/162/12/83]。1月のガマルニクがスターリンらに出した要望が3ヶ月足らずで実現したことを意味している。

ガソリタンク建造についても検討されていた。3月17日ガマルニクは、ルカーシン(ソ連重

工業人民委員部ツェントロソユーズストロイ支配人<sup>(42)</sup>とともに、イルクーツクの東シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長ジーミンに対し、「東シベリア地方は、ガソリタンクの特別突撃建設の遂行を可能にしなければならない。イルクーツクの諸工場には、直径 3200 mm、高さ 11440 mm、厚さ 8 mm、重量 120 t のボイラー用鉄板で 65 t の容量を持つガソリタンクを 5 月 1 日までに 4 基、5 月 15 日までに 8 基、1060 m<sup>3</sup> の容量を持つ直径 11870 mm のタンク 4 基、836 m<sup>3</sup> で直径 10560 mm のタンク 1 基、688 m<sup>3</sup> で直径 9897 mm のタンク 1 基、547 m<sup>3</sup> で直径 9232 mm のタンク 2 基(以上が必要とする金属計 81 t)を、中央から積み込む金属が到着するまでの間、現存の金属で進めるよう指示した」と打電した[ПГБА 9/29/145/105]<sup>(43)</sup>。

同じく 3 月 17 日ガマルニクは同じくルカーシんとともに、イルクーツクのキシキンに「チタの鉄道修理工場が直径 3800 mm、長さ 11440 mm、ボイラー用鉄板 8 mm、総重量 270 t のガソリタンクを 5 月 1 日までに 10 基、5 月 15 日までに 17 基、中央で積み込まれた金属が届くまでチタにある現存の金属で製造できるかどうか連絡されたし。この容器にはガソリンを保管する予定である。設計図は迅速に送付される。この仕事はきわめて不可欠である」と打電した[ПГБА 9/29/145/106]<sup>(44)</sup>。

### 3.6. 通信、新聞

広大なソ連の東西を結ぶ通信の重要性は説明の必要もないだろう。1 月 17 日、ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに次のように打電した。

ブリュッヘルとともに通信に関する諸問題を検討し、1932 年に重工業人民委員部に要請するのは：

- ① 1 万 1000 km の電線を敷設すること：A)ウラジオストック～ハバロフスク～クエンガ区間に 4 線、ソフィースク～デ・カストリに 2 線、ティホニカヤ〔ピロビジャンの駅〕～ミハイロ・セミョーノフスカヤに 2 線、スーチャン～アヌチノに 2 線、B)アヌチノ～ヤコヴレフカ間 100 km、スパスク～カーメニ・ルイボロフ間 100 km の建設、C)126 km 建設によるハバロフスク＝クエンガ間の完成。
- ② 電信拠点に中継機器を再整備：ニコリスク・ウスリースク、ハバロフスク、ポチカリョーヴォ、ルブレヴォ〔ゼーヤの南にあるルブレフカとみなした〕、クセニエフスカヤ、チタ。
- ③ すでに重工業人民委員部のプランで計画されているチタ、ブラゴヴェシチェンスクの無線基地の他に、追加的にウラジオストックに 10 kw の、ニコリスク・ウスリースク、スパスク、ポチカリョーヴォには 2 kw の短波のステーションを建設。
- ④ 通信の修理工場を拡大する：ハバロフスクでは現在の 180 人から 400 人まで増員、イルクーツクでは現在の 150 人から 300 人まで増員。
- ⑤ 月産 2 万個の電池、3000 個の陽極電池の生産性を有する電池工場をハバロフスクに建設。マンガン以外の材料は存在する。



そして 5500 km の電信敷設を行う軍の通信部隊設置計画を提出する。このプランをあなたが採択するならば、重工業人民委員部には、ソユーズスヴァズィ [Союзсвязь、ソ連郵便電信人民委員部は、1932 年 1 月にソ連通信人民委員部に改称した。そのことだと思われる] のスミルノフ<sup>(45)</sup> の申請に基づいて遅くとも 4 月までにはすべての必要な資材を搬入させ、極東地方に 5 人の電気技師、10 人の通信機械技師を派遣させねばならない [РГВА 9/29/145/26 и об.]<sup>(46)</sup>。

ガマルニクは軍隊内の新聞や図書にも注目した。3 月 19 日、ガマルニクはブーリン<sup>(47)</sup> 労農赤軍政治局長代理に「特別赤旗極東軍の革命軍事会議との同意のもと、新聞網への次のような変更、追加を提案する。①第 40 師団に独自の新聞を与える。②ニコリスクで第 26、第 8 騎兵師団その他の守備隊の部隊の一つの新聞を持たせる。③第 21、第 2、第 12 師団にはそれぞれ独立した新聞を与える。連隊の印刷所を第 119 連隊(バラバシ)、第 5 連隊(ニコラエフスク・ナ・アムーレ)、第 170 騎兵連隊(スレーテンスク)、第 75 騎兵連隊(ネルチンスク)に提案する」と打電した [РГВА 9/29/145/117]<sup>(48)</sup>。

3 月 28 日、ガマルニクはブーリンに「特別赤旗極東軍へ 2~3 ヶ月、『赤い星』[労農赤軍機関紙] 編集部の貨車を派遣するのが良いだろう。ただし、質の高いスタッフを準備する必要があるが」と打電した [РГВА 9/29/145/131]<sup>(49)</sup>。図書についてガマルニクは 3 月 30 日、ブーリンに「デグチャリョフ<sup>(50)</sup> に、特別赤旗極東軍への軍事図書、教科書の供給を急増させるよう提案されたし」と打電した [РГВА 9/29/145/132]<sup>(51)</sup>。そして 4 月 1 日、ガマルニクはブーリンに「タスのラジオ日報 [радиосводка] のニコリスク・ウスリースクへの移転をドレツキー<sup>(52)</sup> から勝ち取るように」と打電した [РГВА 9/29/145/139]<sup>(53)</sup>。

### 3.7. 赤軍兵士の収容、住居、軍の増強

ソ連各地から極東へ派遣されてくる兵士の収容は大きな問題だった。1 月 17 日にガマルニクはヴォロシーロフに、「兵舎、倉庫、厩舎、車庫、格納庫建設と移駐してくる部隊の日常的宿営のための住居、1932 年に計画されている組織的方策に、特別赤旗極東軍司令部は 7000 万ルーブルを計上した。新しい建設を極力削減し、居住密度を高め、軍隊の臨時収容のため非軍事官庁の住居在庫量 [фонд] から受け取った部分の活用を念頭に、軍の革命軍事会議と検討したところ、3600 万ルーブルのクレジット支出が必要だと考える。このうち陸軍の兵舎に 2100 万ルーブル、1932 年の組織的方策に関する航空建設に 700 万ルーブル、1933 年の航空部隊に関する組織方策のための建設に 600 万ルーブル、倉庫に 400 万ルーブル、病院の備品 142 箱に 50 万ルーブルである。すでに支出した 400 万ルーブルを除いて総額 3600 万ルーブルとなる。この計算には、陸海軍人民委員部の総合的建設の特別リストで予定されていた高等教育機関、ラーゲリ・ポリゴンは含まれていない。特別赤旗極東軍司令部の建設に関する詳細な予算・計算データは郵送する」と打電した [РГВА 9/29/145/34 и об.]<sup>(54)</sup>。予定されている支出を合計すると 3850 万ルーブルとなり、400 万ルーブルを引くと 3450 万ルーブルとなる。何らかの品目の見落としか、計算違いなのか

不明である。

1月17日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「特別赤旗極東軍革命軍事会議は、軍の参謀部と各局に117名の定員増を求めている。参謀部を観察したところ、95名の増員が不可欠であるが、それでも特別赤旗極東軍の定員はレニングラード軍管区よりも少ないだろう。現地で定員を承認するようあなたの許可を願いたい」と打電した[РГВА 9/29/145/32]<sup>(65)</sup>。またエゴーロフには、「レヴァンドフスキーには貨車に乗せる2日前に指揮官[начсостав]と赤軍兵士の派遣について知らせよう指示を出した。あなたが確認してほしい」と打電している[РГВА 9/29/145/33]<sup>(66)</sup>。

1月29日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「ヴォロノフはウラジオストックで私に話を持ち掛けることはなかった。彼の書簡はおそらくは古くなったのか或いは誤解だろう。私は個人的にウラジオストック、シコトヴォ、ラズドリノエ、ニコリスク・ウスリースクですべての兵舎と指揮官の家を視察し、すべての住宅問題は抜本的に解決されていたが、ところによってはそれらを超抜本的に解決せざるを得なかった。このことは現地の党組織とソヴィエトが非常に活発に支援してくれたおかげだと指摘せねばならない」と打電した[РГВА 9/29/145/47]。ヴォロノフについて、人物を特定できていない。

1月29日にガマルニクは似た内容の電報を、スターリン、モロトフ、ヴォロシーロフにあてて送った。

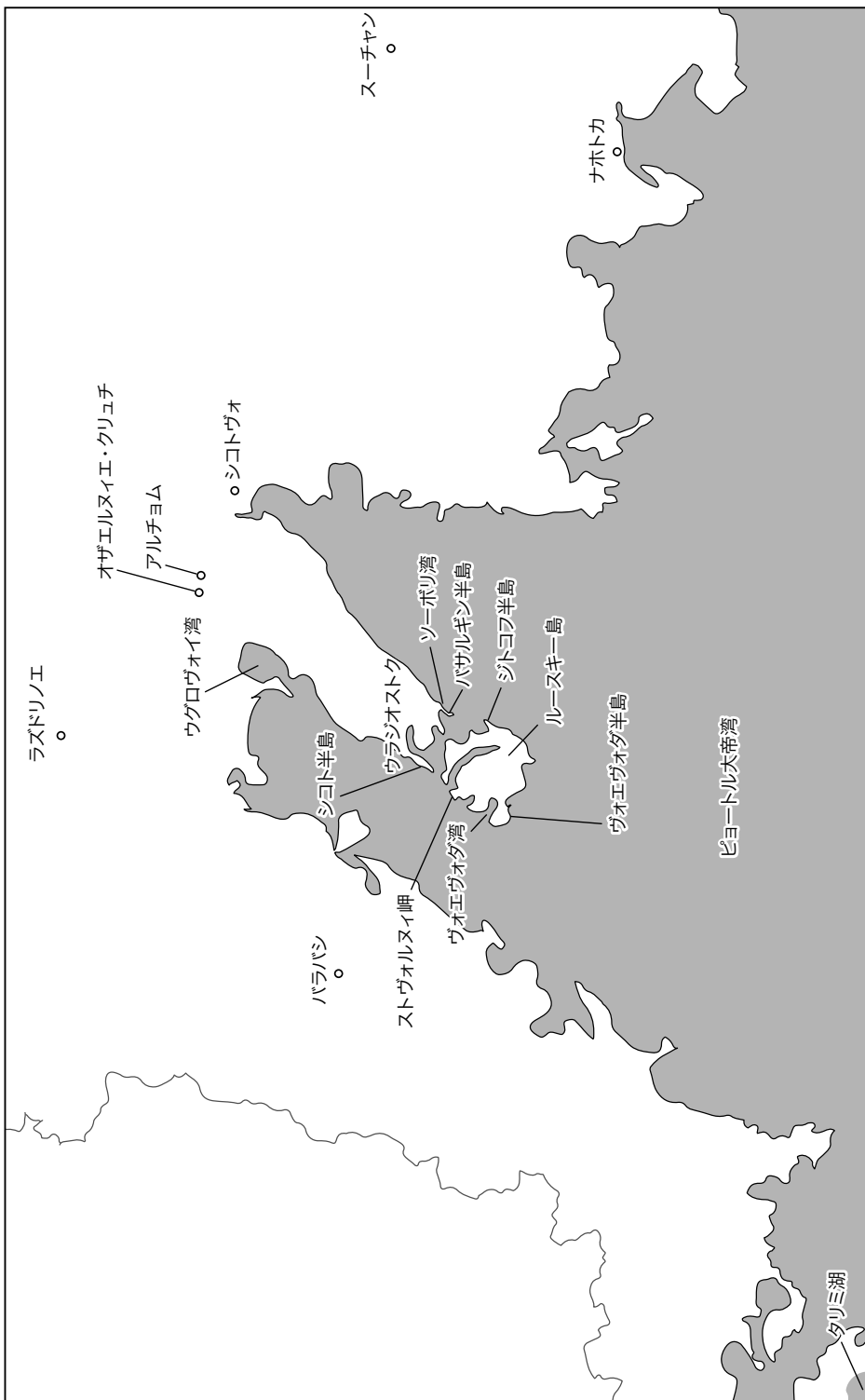
ウラジオストック、シコトヴォ、ラズドリノエ、ニコリスク・ウスリースク地区ですべての兵舎を視察した。ここに駐屯している部隊の密度を高め、半分壊れた兵舎を至急復興し、いくつかの民間の建物を占拠した。これらの方策によって、到着しつつある部隊の満足のいく収容が保証されるだろう。とくに現在、沿海の諸都市で現在精力的に行われている我々に敵対的な分子の粛清によって、指揮官にも同様に、十分にアパートを確保するつもりだ。部隊の住居への収容に関して現地の党機関が最も活発に我々を支援してくれているということを示唆せねばならない[РГВА 9/29/145/48]。

2月24日にはガマルニクがヴォロシーロフに「絶え間なく部隊と指揮官の宿舎への収容を追っており、司令部と地方の党組織に圧力をかけている。明日はこのために特別にブラゴヴェシチェンスクの第12師団に出向き、その後で沿海の全部隊を見て回るつもりだ」と打電した[РГВА 9/29/145/74]<sup>(67)</sup>。

3月26日ガマルニクはヴォロシーロフに打電した。

本日、ラズドリノエ[ウラジオストックの北50kmに位置]で第40師団を視察した。

- ① 兵舎への収容はまったく満足すべきもので、いまのところ家族なしで生活している指揮官も順調に宿舎を手配されたが、家族の来訪とともに、指揮官のアパートの状況は相対



地図 2

的に良いものとなるだろう。

- ② 兵卒も指揮官も師団は完全に定員を補充されている。
- ③ 師団の活動はすでに宿舎への収容の問題から戦闘準備へと切り替わっており、精力的に活動している。
- ④ スタコフ〔Судаков, Фёдор Павлович, 1897-1941、1932年初めに第40狙撃師団長兼コミッサールに任命されていた〕は任命に満足しており、その師団の準備についてのプトナ<sup>(58)</sup>の評価は、沿海グループの他のどの指揮官よりも高い。
- ⑤ 師団の政治的・精神的状況には、軍隊からの逃亡や飲酒など欠陥がある。これに強く圧力をかけたが、当地では現在軍政治部のグループが活動している。
- ⑥ 我慢すれば今でも落ち着ける守備隊に、指揮官の家族の来訪を加速させることが必要だと考える。これは指揮官の政治的・精神的状況のために不可欠である。私が訪れたすべての部隊で、この点を私は頼まれた。特別赤旗極東軍革命軍事会議に私はこの点について指示した。
- ⑦ 特別赤旗極東軍に猟銃を支援していただきたい。これは狙撃訓練の助けになるし、指揮官の栄養改善に著しく貢献する。極東地方では猟銃を手に入れる場所がどこにもなく、特別赤旗極東軍のために他の地域や様々な組織を煩わせる必要がある〔РГВА 9/29/145/127 и об.〕<sup>(59)</sup>。

猟銃支給による栄養改善とは、狩猟による現地での食肉調達を意味するが、それほど食料の調達が困難だったことを意味している。

3月28日にガマルニクはヴォロシーロフに打電した。

ニコリスク・ウスリースクで第26師団、戦車大隊、第8騎兵師団、スパスクで第21師団を視察した。

- ① 第26師団は、民間の建物を占拠しながら、密度高く収容されているが、新しい定員に移行していくと、板寝床を敷き詰めたところでもっと密になって生活することになるだろう。第8騎兵師団の部隊の収容は悪くなく、今のところ機械化大隊のガレージがないだけである。戦車大隊はきわめて良好に割り当てられ、素晴らしい石造りのガレージも確保されている。第21師団はすべて完全に隙間のない板寝床に収容されたが、兵舎は良好でこの収容は満足すべきものだと考える。
- ② ニコリスク・ウスリースクでもスパスクでも指揮官のアパートは悪く、住民や各種組織を密集して住ませ、或いは追放するという強硬な方策を実行したにも関わらず、数も足りない。ここで我々はなんらかを建設することは避けられない。
- ③ 全部隊は強力に仕事に取組み、9時間労働日がすべてで導入され、逸した戦闘訓練の埋め合わせを行っている。指揮官と兵士の気分は、一部の例外を除けば好ましく、勇ましい。

- ④ ニコリスク・ウスリースクでは戦車大隊と機械化大隊が、守備隊の指揮官と兵士たちを非常に勇気づける印象をもたらした。指揮官は自分たちの技術を実見し感じ取った。
- ⑤ 部隊の至る所で、狙撃訓練が大きく注目されているところだが(あなたの夏の出張[1931年夏のヴォロシーロフ出張を意味している]のあと、強烈な足跡が残された)、小口径のライフルや、それとナガン銃の弾丸がひどく不足している。
- ⑥ 私は訪問した部隊のすべての軍隊内共同組合[ЗВК: Закрытый Военный Кооператив、労働者専用の消費共同組合と類似した軍隊内の組織で 1931~1935 年に存在した]を視察したが、香水やおしろい、旅行鞆以外に工業製品は何もない。指揮官はこの点をひどく嘆いている。[極東]地方は何ら助けることはできず、数日前私が訪れたスーチャンでさえ、軍隊内共同組合の労働者の状況は、ましとはいえない。特別赤旗極東軍の軍隊内共同組合のための工業製品の移動に関して、あなたにはゼレンスキー、ミコヤン、そしてアンドレーエフに非常に大きな圧力をかけてほしい[РГВА, 9/29/145/129 и об.]<sup>(60)</sup>。

満洲事変勃発直後の極東に駐屯していた兵士の中には、不満を抱いていた者も少なくなかった[寺山 2021]。

### 3.8. アムール小艦隊、水運、ソヴトルグフロート

満洲国との国境線を形成することになるアムール川は、警備上も非常に重要な役割を果たすことになる。1月17日、ヴォロシーロフに対してガマルニクはアムール小艦隊について、7項目に分けて詳しく報告している。以下に全文を引用する。

- ① 諸船舶の修理は満足すべきもので、資材も労働者も確保されている。司令部は4月15日までにすべての船舶の修理終了を約束している。
- ② あなたの命令 No. 0017 に基づいた諸船舶の再建事業はうまくいっていない。モニター艦タイフーン、スメルチは船体をドックに入れて調整され、欠陥リストと予算は海上部隊局に10月に提出されたものの、今に至るまで今後何をすべきなのか指示がなされていない。これらを急いで戦列に加えることが不可欠だと考える。再建プランで承認されたクレジットをハバロフスクへ至急送付すること、機械や装備も送ること、以上をオルロフ[Орлов, Владимир Митрофанович, 1895-1938, 1931年7月より労農赤軍海軍長官]に対してあなたが指示を出すことが必要だ。本年5月1日までに装甲ボート2隻を戦列に加えることも問題になっている。技術局がエンジンに関する問題の解決法を見出していないからであり、決定を急ぐよう求める。
- ③ 5月1日までにはオソアヴィアヒムの貢献で、砲艦モンゴルに3インチ野砲2門、機関銃10門の装備がなされて再建されるだろう。この砲艦は250人を収容でき、上陸のために利用可能である。定員の承認、スタッフの補充に関する命令をお願いしたい。

- ④ モニトル艦の距離計は根本的な修理が必要である。砲兵の評価によれば、射撃の際にこれは使用できない。早急に取り換える必要がある。
- ⑤ アムール川における機雷利用の問題の検討は不十分で、戦闘準備においてありうべき地位を占めていない。現存の備蓄を2倍にし、機動的課題に応じて戦場で分散させねばならず、そのためには港に機雷を集積させ、将官「[1文字不明]」を派遣せねばならない。現存する機雷のより合理的な利用については現地で検討する。
- ⑥ 船舶における無線通信は整備されていない。作戦期間の開始までにそれらが設置されるよう、小艦隊のために製造された携帯用無線電話機[рация]を急いで送る必要がある。ニコラエフスク＝デ・カストリ、ミハイロ・セミョーノフスカヤに監視・連絡を任務とする部隊を創設する問題を中央で検討する必要がある。
- ⑦ 小艦隊にはより賢く、有能な参謀長が必要で、アンニン<sup>(61)</sup>は解任せねばならない。
- ⑧ 小艦隊には当面の燃料備蓄しかなく、非常用備蓄[неприкосновенный запас]のためのタンクがない。今年中に300tの石油タンクを作ることが必要で、そのための資材とクレジットが不可欠だ[РГВА 9/29/145/27-31]<sup>(62)</sup>。

1月22日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「732-III[文書番号を指す]について、小艦隊の参謀部長にはソロンニコフを任命することが望ましい」[РГВА 9/29/145/40]と打電した。小艦隊とはアムール小艦隊のことである。ソロンニコフ<sup>(63)</sup>は、キエフに司令部のあるドニエプル川小艦隊での活動でガマルニクと旧知の間柄であった可能性がある。河川艦隊の経験が重視されたのかもしれない。

2月28日ガマルニクはスターリンに、「水運人民委員部に関する一連の問題解決のため、諸人民委員部全権代表の小委に水運人民委員部の代表も派遣するよう求める」と打電した[РГВА 9/29/145/76]<sup>(64)</sup>。

1月の視察以降の進展状況について、3月5日にガマルニクはヴォロシーロフに次の3点について打電した。以下に全文を引用する。

- ① 2隻の新しいモニトル艦、ディーゼル2台の問題が早急に解決されるのであれば、6月には実戦に配備可能である。発電所に関する技術局の試案は合理的でない。到着した技術局の技師たちは、最良の出口はバルト艦隊で潜水艦No. 6のディーゼルを取り外すことだとみなしている。潜水艦は胴体が老朽化し退役の予定だが、そのディーゼルは以前モニトル艦で使われていたものだ。小艦隊の修理工場の強化のため、70人の熟練労働者を急いで派遣することが必要である。オルロフのところに申請書がある。
- ② 装甲ボート2隻のためのリベルティの約束されたエンジンは到着していないし、いつ来るのかの情報もない。そのためあなたが課した期限内にボートが配備されることを妨げている。

- ③ 再興されたモニター艦、砲艦モンゴル、機雷班、通信業務のための指揮官、機械工、その他のスタッフのハバロフスクへの派遣を急いでほしい。ここ 1 ヶ月半、これらに必要な人は 1 人も来ていない。新しい小艦隊参謀部長ソロンニコフの出発も急いでほしい [РГВА 9/29/145/84 и об.]<sup>(65)</sup>。

リベルティとはアメリカ製の Liberty エンジンのことで、第一次大戦末期にパッカー社で設計、アメリカの戦時局に採用された。英国空軍で 1933 年まで、米国陸軍でも 1934 年まで使用された [ガストン 1996: 128-130]。ソロンニコフについては、上述の通り、1 月 22 日にヴォロシロフに推薦していた。

同じ 3 月 5 日、ガマルニクは水運人民委員部のゾフ<sup>(66)</sup>に、「あなたの来訪はアムールとソヴトルグフロート [Совторгфлот、ソヴィエト商船団] の活動の根本的再編と強化のために不可欠である。来訪を急ぐようお願いするが、モスクワにいるうちに次の諸問題の解決を御願ひする」として、6 点を挙げた。以下に全文を引用する。

- ① アムール川のため、手元のリソースを動員するとともに、中央で新たに発注してハバロフスク、ブラゴヴェシチェンスクで組み立てることで少なくとも 20 隻のタグボートを投入すること。ウラジオストックには、ダリザヴォード [Дальзавод、ウラジオストックの造船工場] が準備したタグボート 2 隻の機械装置や、ここで発注した 400 隻の強力なボートのための鋼板、山形鋼を急いで送ること。
- ② ブラゴヴェシチェンスクには、ここで組み立てている石油輸送平底船のために、必要なリベット、ボルト、設備を早く送ること。水運人民委員部による断固たる方策がなければ、これらの平底船は進水できず、極東地方にはサハリン産石油が入ってこなくなる。次に、船台の解放に続いて起工するため、このような平底船の第 2 シリーズをソルモヴォ [ニジノヴゴロドの造船工場、革命後に赤いソルモヴォ Красное Сормово の名称で呼ばれることになった] で準備すること。
- ③ ハバロフスクで組み立てることにして、アムール水域へ二つの浚渫船団を渡すこと。
- ④ 貨物・旅客蒸気船 2 隻リュクス、カナヴィノのハバロフスクでの完成を保証すること。そのためにクレジットを付与し、ソルモヴォ、コロメンスク工場 [モスクワ南東約 100 km のコロムナにある機械製作工場 Коломенский завод] でのディーゼル積み込みを加速すること。
- ⑤ ウラジオストック港の船舶の動員準備 (機雷敷設艦と掃海艇) に関する諸問題を解決すること。詳細は労農赤軍参謀部でカラチョフ<sup>(67)</sup>のところで聞かれない。
- ⑥ 水運人民委員部の船舶修理工場をウラジオストックで展開すること。修理工場が不可欠なため、第 2 工場は軍港に返還すること。
- ⑦ 出発時を電報で送られたし [РГВА 9/29/145/88 и об.]<sup>(68)</sup>。

3月11日、ガマルニクは水運人民委員部のゾフに、「アムール川における諸工場建設との関連で、アムール川国家汽船 АГРП〔Амурское государственное речное пароходство〕の輸送プランが増大したので、ラザレフ〔Лазарев〕には、7万tの輸送能力のある139隻の木製平底船の建造にすぐに取り組むよう命じた。このために当地で私が行った以外に、あなたの方で次の方策が不可欠である。

①ブラゴヴェシチェンスク、ハバロフスク造船所の建設完了に75万ルーブル、木材の調達に250万ルーブル、埠頭と倉庫建設に87万ルーブル、これらの資金をすぐに支出する必要がある。

②〔ラザレフの〕申請にしたがい、特殊な釘とコートを送ること〕と打電した〔РГВА 9/29/145/91 и об.〕。

4月16日ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフ、ヤンソンに「アムール水域への15隻のタグボート、6隻のハイドロプレーン、4隻の石油積み込み平底船の移転、我々がすでに当地で始めた7万tの木製艇建造を、水運人民委員部の組織内で取り組む件、以上についてあなたの方の決定をお送りください。これらの問題は、特にペルムスコエの諸工場の建設期間を可能にするためにきわめて重要だ」と打電した〔РГВА 9/29/145/166〕<sup>(69)</sup>。

### 3.9. 食料

多数の兵士や労働者が来訪した極東地方は食料を自給できないため、他所から輸送する必要があるが、単線を含むシベリア鉄道を利用した食料の輸送は大きな問題を抱えていた。

最初に製粉が問題となっていた。1月21日ガマルニクはヴォロシーロフに、「製粉所はこの1年現地に残さねばならないし、残せると考える。ブリュッヘルも私に同意した。これに応じた命令が出された」と打電した〔РГВА 9/29/145/38〕<sup>(70)</sup>。

1月23日ガマルニクはヴォロシーロフに、「1933年春以降もクラスナヤ・レチカ〔ハバロフスクの南部の村〕に製粉所を残すかどうかという問題は、そこでどれだけ航空が拡大するのにかよって決定される。これとは関係なくハバロフスクには新しい大製粉所を建設する必要があり、ロバチョフ<sup>(71)</sup>〔ソユーズフレーブ取締役会議長〕がその任に当たらねばならない〕〔РГВА 9/29/145/43〕と述べた。ソユーズフレーブとは、1928年に設立された全ソ国営株式会社ソユーズフレーブ（Всесоюзное государственное акционерное общество «Союзхлеб»）のことで、国家が調達する穀物の保管を担当していた。

極東へ派遣される人員が増大するにつれ、食料事情は深刻さを増していった。ガマルニクの発信は緊迫した状況を示している。3月3日にガマルニクはノヴォシビルスクのエイへ、イルクーツクのレオーノフに打電した。「極東地方の穀物、飼料の状況はまさに破滅的で、備蓄は3日分しかない。極東地方を支援し、中央委員会の決定に従い、食料飼料貨物の積み込みを強化するよう切に願う〕〔РГВА 9/29/145/79〕。

同じ3月3日、ガマルニクはチタのキシキンに打電した。「極東地方の穀物、飼料の状況は日を追ってますます厳しくなっており、備蓄は4日分しかない。これとの関連で本日、インスタントには一連の問題を提起したが、特に、①3月10日から17日まで、トムスク、ザバイカル



鉄道での穀物の積み込みを 150 貨車に増やすこと、ウルシャ通過を 3 月 10 日から 22 日にかけて 115 貨車以上、22 日から 31 日にかけて 150 貨車とする。②穀物貨物の 1 日の走行距離を 400 km とし、他のあらゆる貨物を差し置いて穀物を第一に輸送する。③ 3 月 7 日、トムスク、ザバイカル、ウスリー鉄道への穀物と飼料貨物の移動を実施し、9 日にあなたにデータを提示する。④特別の直通貨物列車〔маршрут〕を編成するため、車両入替作業〔манёвр〕が可能なすべての駅で、穀物貨物を選び出すこと。あなたにはザバイカル、ウスリー鉄道同様、穀物輸送で最も精力的で特別の方策を早急に取るようお願いする。トムスク鉄道に関して、「ミローノフと連絡をとられたし」〔РГВА 9/29/145/80〕。

翌 3 月 4 日、ガマルニクは次の通り打電したが、文書には宛先が抜け落ちている。

極東地方の穀物の状況は悪化し、きわめて重大である。ノルマを削減するなかで備蓄は 4 日である。食料穀物を毎日貨車 100 台分積み込み、2 月 25 日までに 1 日貨車 60 台、それ以降は 90 台をウスリー鉄道に引き渡すという中央委員会の命令をトムスク鉄道は実行しておらず、実際には、① 2 月 11~26 日、貨車 768 台、すなわち 1 日 51 台を積み込み、②ザバイカル鉄道での穀物の移動は非常に悪い。ウスリー鉄道のスコヴォロディノを通過した穀物貨車は 1 月の 119 台に対し、2 月は 99 台に終わり、2 月最後の 4 日間には、中央委員会の決定によれば貨車 360 台が通るはずのところ、37 台にとどまった。次の方策を提案する。① 3 月 10~17 日、トムスク、ザバイカル鉄道で 150 貨車まで積み込みを増やし、同数の貨車がおおよそ 3 月 22~31 日にウルシャを通過するのを可能にする。3 月最初の 10 日間にトムスク、ザバイカル鉄道が 825 貨車の穀物積み込みを必須条件とする中で、150 貨車まで増加させるのは最低限のことだ。②あらゆる残りの貨物を差し置いて、穀物貨物の順番を度外視した優先性を確保し、1 日に少なくとも 400 km 走行を維持して移動を加速化させること。③車両入替作業が可能ならすべての駅で、すべての列車の中から穀物貨物を選び出し、穀物の直通貨物列車を編成すること。そのために 3 月 7 日には、トムスク、ザバイカル、ウスリー鉄道で穀物貨車のリストを作成し 3 月 9 日にそのデータをキシキンに提出すること。④ 3 月 10~22 日に穀物貨物を積んだ少なくとも貨車 115 台がウルシャを通過することを可能にすること。⑤穀物貨物の積み込みと円滑な移動が、近い将来キシキン、ミローノフにとっての基本的な課題となるべきである。⑥西シベリアには、東シベリアに穀粉を半分、積み込ませる。⑦適時かつ完全に食糧を積み込み、その極東へのいち早い移動を可能にするよう、中央委員会は再度、エイヘ、レオーノフに断固促すようお願いする。本日、食料貨物の積み込みと移動を加速化させるべく、東と西シベリアへアンツェロヴィチと地方の活動家グループを派遣する。キシキン、ミローノフに、これらの問題が厳しく課せられた。これらのすべての方策が、特に交通人民委員部によって完全に実行されたとしても、極東地方の困難な食料事情を若干緩和するだけで、穀物問題を完全に解決することはないだろう。したがって 2500 t の穀物を南部の港から海路、至急積み込む問題を中央委員会に提起することが不可欠であると考

える。しかし南部の港で急いで積み込んだとしても、極東地方に穀物が届くのはやっと4月後半になってからであり、3月中の穀物問題の解決にはならない。よって穀物の緊急輸入が不可欠であるとする[РГВА 9/29/145/82]。

同じ3月4日にガマルニクはミローノフ交通人民委員代理に、「極東地方の穀物と飼料の状況は破滅的で、積み込みと輸送の最も緊急的かつ非常手段が今後10日間のうち特別な意義を有している。中央委員会には以下の問題を提起した。①トムスク、ザバイカル鉄道で3月10～17日に穀物だけで90に代えて150貨車へと積み込み量を増加、②穀物の直通貨物列車の移動を1日400kmとする。③穀物の直通貨物列車を形成するため、穀粒、穀粉、挽き割りのグループごとに穀物貨物のリスト作成を3月7日に行う。リストには個別に飼料も含む。④状況の例外性を理解し、あらゆる手段で極東地方を支援するよう、あなたには心の底からお願いする」と打電した[РГВА 9/29/145/83]。

3月14日、ガマルニクはイルクーツクの東シベリア地方党委員会レオーノフとアンツェロヴィチに、「我々は非常用備蓄〔неприкосновенный фонд〕の備蓄解除に反対する。命令に関する電報は本日、フロプリアンキンがあなた方に送付した」と打電した[РГВА 9/29/145/94]。満洲事変を契機に備蓄委員会が設置され、ソ連全土で備蓄の構築が進んでいたが、穀物については非常用備蓄と動員(または運用)備蓄(мобилизационный фонд)に分けられ、両者が労働国防会議のもとで国家備蓄(государственный фонд)と見なされることになった[寺山1998a]。

3月15日、ガマルニクはフロプリアンキン、メジト(Мезит、詳しい経歴は不明)とともに、ミコヤンに「ハルビンからのあなた宛ての電報のコピーを受け取ったが、そこには穀粉の購入の困難さについて知らせており、穀粉の購入を続行するべきか、あなたの指示を仰いでいる。極東地方にはできるだけ多くの穀粉が必要であり、このことを我々はクズネツォフ、ルードゥイに懇願しているが、もしも必要な量の穀粉の購入に彼らが成功しない場合でも、それでもやはり我々は、インスタンツィアの課題すべてを完全に実行するまで、彼らが穀物を購入することは絶対に必要だと考えている」と打電した[РГВА 9/29/145/101]<sup>(72)</sup>。3月4日のガマルニクの電報で彼が「穀物の緊急輸入」を主張した通り、満洲における穀物購入が進行していた。

3月17日ガマルニクは、フロプリアンキンとともにモロトフ、ミコヤンに打電した。

軍の需要を除き、第2四半期に最低限必要なエン麦は3万5000tである。林業に6000t(各地への輸送と第3四半期の需要も含む)、金産業に5000t(不可欠な3ヶ月分の備蓄構築を保証せず)、極北への輸送に1万5000t、コリマに3000t(要請された1万tに代えて)、さらにダリウーゴリ、初期の戦略的活動、鉄道の需要、ネフチェストロイ、ヴォエンストロイ、ストロイ、ダリザヴォード、アヴィアザヴォード、建設資材、セメント、河川輸送—木材調達、通信、フラドストロイ〔Хладострой〕、赤軍兵士コルホーズ、木材調達、その他建設資材を必要とし、そのほとんどは自ら木材調達を行う各種企業等、以上が基本的な消費者で

ある。これらの需要を満たすためには、奥地に残った 1000 t、3000 t の糠の利用を提案するが、第 2 四半期に地方が受け取ることになる油粕 4000 t の利用許可をお願いする。3 万 6000 t のうち足りない 2 万 7000 t を、極東地方の外から至急運ばせるようお願いする。シベリアのリソースに限界がある万が一の場合に備え、エン麦について 5000 t ずつ〔備蓄を〕構築すること、ハルビンでの一定の穀物購入を許可した。繰り返すが、上述した要請は、第 2 四半期にのみ関連した最低限のもので、保険をかけて備蓄を構築するためにも第 3 四半期の積み込みを 2 万 7000 t から 3 万 7000 t に増やすのが望ましい。第 3 四半期の申請は約 10 日後に送るつもりだ。極東地方の外からのエン麦受け入れが特に乏しい中で、今四半期は主として、遠隔地の奥地からの運び出しで終えようとしている。極東地方におけるエン麦の状況は非常に厳しく、今現在、経済活動、特に林業の展開に大きくブレーキがかかっている〔РГВА 9/29/145/107〕<sup>(73)</sup>。

同じく 3 月 17 日、ガマルニクはフロプリャンキンと連名で、モロトフ、ミコヤンに打電した。

軍を除く第 2 四半期の供給、輸送プランを確定した：①穀物に関して、極北への輸送 4.7 万 t を含め、10.5 万 t。穀粒がある中で、穀粉の不足で困難が生じうる。穀粉の輸送増大についてのミコヤンへのフロプリャンキンの電報に関して、要望に応えられるようお願い。②肉について 5400 t とし、うち 1400 t は極東地方のリソースでカバーする。屠殺後の重量で 4000 t を極東の外から輸送するよう命令をだしてほしい。③魚については 9728 t とする。④挽き割りは 1 万 t とし、このうち 3700 t は極東地方でカバーし、2100 t は満洲 (20 万ブードのソバ) から輸入する。4300 t を輸入する命令を出してほしい〔合計すると 1 万 100 t になる〕。このうち 1000 t は第 3 四半期のための備蓄とする。⑤植物油については 2500 t とし、このうち 1322 t は極東地方でカバーする。1178 t を極東地方へ運び込んでほしい。⑥半分を 5 月 1 日までに、残りの半分を 6 月 1 日に運び込ませてほしい。⑦供給組織には、発送された貨物の移動状況を我々が迎れるよう、10 日ごとに積み込み地点を我々に知らせることを義務付けることが必要だ。第 3 四半期の供給プラン、将来を見据えた第 3 四半期に実行すべき輸送プランをおよそ 10 日後に連絡してほしい〔РГВА 9/29/145/108-110〕<sup>(74)</sup>。

3 月 18 日ガマルニクは、スターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに「木材調達におけるえん麦の状況が非常に困難である。櫓が利用できる最後の数日を利用し、泥濘期までに遠隔地のレスプロムホーズ〔леспромхоз = 木材調達企業〕に少しでもいいので、えん麦をすぐに送り届けることが不可欠で、そのために国家備蓄から 1500 t のえん麦を、1 ヶ月後に備蓄に返却することにして、借用する許可をあなた方にいただきたい」と打電した〔РГВА 9/29/145/112〕<sup>(75)</sup>。

4 月 12 日ガマルニクはフロプリャンキンと連名でソヴナルコム議長代理クイブイシェフに打電した。

各地に視察に出かけていたため、それにあなたが知らせてきた計算と極東地方の需要が大きくかけ離れていた理由を探る必要があったため返事が遅くなったが、そのために現地に出向いて複雑な計算を行い、職員を召いて話を聞く必要があった。「特別な流入」が備蓄の補充なのか、ハルビンでの購入なのか、どちらを指しているのかわからない。さらに、「3万6000tの穀粉も含め」という表現が、15万tに関係するのか、それとも「特別な流入」の計算に入っていない数に関係しているのか（3万6000tの穀粉を含む特別な流入を考慮せず）わからない。スターリン、モロトフが海路3万tを発送したと知らせてきたのに、なぜウクライナから海路5000tしか向かっていないのかについても理解できない。1月1日から新たな収穫まで15万tを運ぶという計画は、以下の計算から受け入れがたい：1月1日現在、穀粒は3万9000tの余剰があり、第1四半期に1万t調達し、中央の命令で〔1931年の〕第4四半期にシベリアから送られた4000tを第1四半期に受け取った。調達委員会は15万tを引き渡す予定である。全部で20.3万t受け取ることになり、これは穀粉に換算すると18.3万tとなる。

第1四半期には軍を含めて6.1万tが消費され、第2四半期には政府小委が最終的に10.3万t〔の消費〕を承認し、第3四半期には軍を含めおよそ10.8万t〔の消費〕が予定されており、穀粉換算で合計27.2万tとなる。その結果8.9万tが不足することになる。

もしもハルビンの穀物を15万tの勘定に入れないと、不足分は5.9万tとなる。極東地方の指導者も参加して政府小委が検討した第2、第3四半期の穀物消費プランは最低限のものである。第3四半期プランの主な支出項目を列挙することが必要だと思う：特別リスト＝国防強化事業6万人、造船、飛行機工場、パルムスコエ村2万2500人、地下の炭鉱作業1万1500人、総勢9万4000人、よって5900tが必要となる。第1リスト＝石炭産業、ダリザヴォード、ダリセリマシ、ウラジオストックとブラゴヴェシチェンスクの冶金工場、木材輸出工場、セメント工場、新建設、石油精製工場、アルチョム国营地区発電所〔ГРЭС〕、ハバロフスク発電所、ウラジオストックの砂糖工場、ウラジオストック水道、港湾冷蔵庫、塩、ダリザヴォード、セメント建設、アムール＝ヤクーツク幹線、通信、その他の電話線、精密機械工場、極東油脂コンビナート、市内教員、研究者、軍政学校〔политвуз〕の中国・朝鮮人、地質調査、ソユーズトランス、エクスポートレースの御者、航空〔воздухофлот〕、オゲペウの建設、戦略的軍用道路建設、オゲペウの機動職員、その他の小さなグループ、総勢21.4万人（12.3万人の労働者やその他の職員や家族を含む）。第1リスト全部で必要なのは8800t、第2リストは稼働中のウラジオストックとハバロフスクの発電所、製材工場、製粉所、大型穀物倉庫、学生、技師や技手、教員、散弾製造工場〔дроболитейный завод〕、新建設、マッチ工場、電話局、軍用道路建設、その他の企業で、労働者、職員、家族を合わせて7万8000人で3000tが必要となる。第3リストは14.2万人で4200tが必要である。鉄道輸送、水運、それに両者のリストの輸送建設は29.5万人で1万1400tが必要である。漁期には6800tで、漁期に米の代わりに穀粉が2300t、金産業に7000t、木材業に6300t、極北に1万6000t、刺激付与策として1000t、村落への全体的供給＝穀物・畜産ソフホーズ、教員、医学生、赤

軍兵士移住者、ユダヤ人移住者その他に 4200 t、オゲペウの収容所に 2300 t、コリマに 3300 t、軍隊内共同組合(3BK)を含む軍部に 1万 4500 t、一般人の栄養 2200 t、閉鎖組織 600 t、両工場のためのペルムスコエ村への年間輸送 7300 t、全部で第 3 四半期には 10.8 万 t となる。第 2 四半期の穀物消費に関する小委が承認したプランは、第 3 四半期の計画と符合しているが、第 2 四半期には、現存行われている供給よりも少ないが、極北へより多く運ばれている。

直接国防的性格を有していたり、国防事業とかなりの部分で関連した建設が大々的に展開していること、極北への穀物を 1 年分輸送する必要があること、その際、一連の最重要の活動を可能にすべく、小委は中央の予定案のいくつかの項目を削り、リストに残ったすべての項目についてノルマを 300 グラム以下に削減したのだ、ということを考えてほしい。工場に必要な木材の需要が一部満たされておらず、極東地方の状況にあってはまったく不可欠な備蓄も考慮されていない。労働力を集めるための募集プランがうまくいっていないこと、仕事がおよそ 10% 実行されていないことを考慮し、節約が可能で、それを備蓄に回すよう提案する。

第 2 の最重要の問題は、自身の製粉場所が極めて限られている中で、極東地方にいかにか穀物を供給するかということである。あなたからの 3 月初めと 3 月半ばの以前の電報、それにフロブリヤンキンからミコヤンへの電報には、まさに穀粉を運び込む問題が明確に提起されていた。そのうえ[ロシア]南部から 3 万 5000 t の穀物を輸送するとの連絡を受け取ったので、我々は蒸気船で穀粉を運ぶよう頼んだのだが、ほとんど穀粉は受け取っておらず、その結果、現在穀粒はあるものの穀粉の供給に困難を来しているというのが現状である。第 2 四半期には、ソユーズムカーの製粉所による極東地方の穀粉 5 万 6000 t を受け取ることになっているが、そこには 1000 t の残余も含んでいる。海路 5000 t、鉄道で 3 万から 2 万 t、ハルビンから 4000 t 到着することを考慮すると、穀粉の不足は 3 万 5000 t ということになる。その他の管轄下にある製粉所で 7000 t 以下の製粉が確保できるので、6 月 15 日までに到着するよう、他の地方から残りの 2 万 9000 t を蒸気船或いは貨車にすぐに積み込まねばならない。これだけの穀粉があれば現在の需要とともに、極北への輸送分にも充てられる。新しい収穫までのあらゆる需要をカバーし、必要な量の穀粉を供給できるよう命令を出していただきたい。即答を待つ[PTBA 9/29/145/150-152]。

この電報から判明するのは、製粉後の穀粒 = 穀粉の重量は一割減少すること、第 2、3 四半期の予定を含めて消費側が 6.1、10.3、10.8 万 t 計 27.2 万 t であるのに対し、供給側は 3.9 万 t (手持ち分)、1 万 t (第 1 四半期調達)、0.4 万 t (シベリアから 1931 年分)、調達委員会から 15 万 t 計 20.3 万 t (穀粉で 18.3 万 t) で、8.9 万 t (27.2 - 18.3 = 8.9) の不足となるが、ハルビンからの輸入穀粉 3.6 万 t が 15 万 t の中に含まれていなければ(この点でガマルニクはクイブイシェフの不正確な情報に困惑している)、不足分は 5.3 万 t となる。したがって不足分 5.9 万 t というのは計算違いだろう。

1人あたりの消費量だが、特別リスト 62.8 kg(9.4万人、5900 t)、第1リスト 41.1 kg(21.4万人、8800 t)、第2リスト 38.5 kg(7.8万人、3000 t)、第3リスト 29.6 kg(29.5万人、1.4万 t)、鉄道、水運、鉄道・水運建設 38.6 kg(29.5万人、11400 t)として計算されていることが判明する(表1を参照のこと)。3ヶ月90日で割ると、1日あたりそれぞれ 0.7 kg、0.46 kg、0.43 kg、0.33 kg、0.43 kg ということになる。漁業や金産業、軍などその他の項目については人数についての情報はないが、軍への割当量 1万 4500 tが第1リスト並の1人あたり 40 kgを想定していたと仮定してみると、36万 2500人ということになる。特別赤旗極東軍、アムール小艦隊、極東海軍、国境警備隊の兵士や指揮官、その家族の人数を含めた数字となるのだろうか。軍の増員の過程についてさらに詳しい調査が必要だ。ウラジオストックへ海路輸送が予定されていた3万 tの穀物は、政治局が3月14日に西側に向けて輸送することを決定しており[寺山 2000b]、ガマルニクにその情報が伝わっていなかったようだ。それを補填するために大連での購入を決定していたのである。

表 1

	人数(人)	必要量(t)	四半期1人あたり(kg)
特別リスト	94000	5900	62.8
第1リスト	214000	8800	41.1
第2リスト	78000	3000	38.5
第3リスト	142000	4200	29.6
鉄道、水運、鉄道・水運建設	295000	11400	38.6
その他(漁業、金産業等)	—	73800	
合計	823000+α	107100	

4月15日またもやフロブリヤンキンとガマルニクはクイブィシエフに「終了した中国における穀物購入の総括的データを受け取ったばかりである。小麦=156万ブード[1ブード 16.38 kgなので2万 5552 t]、小麦粉 128万 7000ブード[同じく2万 1081 t]だが、我々の決済を分析する際には上記の変更を考慮するようお願いする」と打電した[PTBA 9/29/145/164]<sup>(76)</sup>。

4月15日、「デリバスを通じて。ハルビン……。ドミートリエフの報告によれば 322.8万ブード[5万 2874 t]が購入された。モスクワは満洲で購入される穀物分として 5000 tの飼料の購入を許可していたことを考えると、与えられた許可の範囲を越えてあなたが大麦の購入に着手したのではないかと懸念する。』[PTBA 9/29/145/165]。

日付は不明だが、4月20日頃、ガマルニクはソ連ソヴナルコム議長モロトフに打電した。

第3四半期の供給プランを送る。

- ① 各種食料(例えば肉、挽き割り)について政府が承認した供給ノルマと、同じく政府の様々な命令を根拠に出された各省庁や組織の申請(例えば金産業、肉、サハリンについて)を削減した。リソースや輸送の現状から、定められたノルマと命令(添付した表を参照のこと)に基づいた量の食料を、他の地域から運び込むことが不可能なためである。
- ② リストに基づいて住民に分配するのは、きわめて大雑把な性格をもっている。というの

もこのリストにしたがって小委がノルマを削減したり、削減されたノルマさえリストの大部分に対してまったく支給を想定しなかったりしているからだ。例えば第 1 リストに関して、肉は 2 kg に代えて 1.2 kg まで削減されたが、この削減されたノルマにしたがった 464 t ではなく 220 t、すなわち肉はリストに基づく半分しか提供されないのだ。

- ③ 小委は備蓄を考慮していない。小委はまた、かならず実行される一連の作業に関して食料の放出を予定していない：とくに極東地方で大規模に行われる予定の木材の自己調達に対する支出をまったく予定していない。

これらの需要をカバーするためには、一連の作業に関する労働力の過少募集によって創出される節約に頼らざるを得ない、と小委はみなしている。大雑把に言って、多くの作業に関して 5%、ときには 10% この過少募集を計算できる。ソ連全土の全体プランを検討するのは別に、第 3 四半期の極東地方の供給プランを事前に承認するようお願いする。というのも、経験が示すとおり、輸送には 2~3 ヶ月かかるからだ。フロプリヤンキン

追伸：我々の暗号に対するあなたからの返答を受け取っていないので、第 2 四半期の計画はあなたには明らかに報告されなかったと思われる。合同は割当量と保有量を供給しているが、それらは小委が承認したものや、極東地方の諸組織が現在の仕事を基礎に置いた諸計画とはかけ離れたものである [PTBA 9/29/145/171]<sup>(77)</sup>。

#### 1932 年第 3 四半期の需要プラン

①各人民委員部や組織のノルマと申請は、小委によって至るところで削減された。例えば肉に関してノルマと諸組織の申請にしたがえば、14369 t 支出せねばならなかったが、小委は 8303 t の支出にとどめた。これはノルマを削減し、申請も削減したことによる(特別リストに関しては、政府が承認した 3 kg というノルマに代えて小委は 2.4 kg とした。第 1 リストに関しては、2.5 kg に代えて 1.2 kg、第 2 リストに関しては政府承認の 1 kg に対して小委は何も指定せず。このほか、金産業に関しては生産財政プランにしたがえば 1605 t 放出せねばならないが、小委は 1105 t に、漁期には 800 t に代えて 150 t、サハリン、石油採掘その他には 1593 t に代えて 1093 t を定めること等)。挽き割りについてはノルマと諸組織の申請に従えば 15451 t を支出せねばならないが、小委は 9755 t の支出を決定した。これは個人的供給及び外食施設へのノルマの削減によってもたらされた(特別リストに関しては政府が承認した 3 kg に代えて小委は 2 kg に、第 1 リストについては 2.5 kg に代えて 1.5 kg、第 2 リストについては 1 kg に代えて 0.75 kg、第 3 リストとその他については何も指定せず)。植物油については、ノルマと諸組織の申請に従えば 2294 t の支出が必要だが、小委は 2147 t の支出を定めた。[2 行ほど判読不能]。穀物についてはクイブィシェフあての電報で詳しく、極東地方への穀物供給に関する小委の計算を述べた。穀物に関する備蓄を確定する際に、小委は引き渡しノルマの削減を行ったが、とくに：畜産ソフホーズに対しクイブィシェフは 1680 t の支出を予定していたが、小委は約 1100 t と決定、そのほかのグループ(全リストの職員と

労働者の家族)に対して小委は、政府が定めた特別、第1、第2リストに対する25.5 kg、第3リストへの22.5 kgに代えて19.2 kgというノルマ、すなわち1日400gではなく300gの支出というノルマを採択した[РГВА 9/29/145/172]。

極東地方で食料が不足していた実態、それにいかに対処しようとしたのかが明白だが、事情は複雑で解明は難しい。これらの電報に基づきさらなる精査が必要である。

### 3.10. 沿岸防衛（機雷敷設、砲台設置、潜水艦建造）、陸上部隊の再編

ウラジオストックを中心とする沿岸防衛に向けた対策が重要課題の一つであることは間違いない。

1月27日にガマルニクはヴォロシーロフに、「手始めに機雷900個、対機雷装置[Минный защитник]のことで、ソ連では1926年にM-3というタイプが開発されていた]300個の投入、機雷班の創設に関する命令を御願います。ウラジオストック強化地区沿岸防衛担当の司令官代理の任命を急いでほしい。すでに推薦したムシノフ<sup>(78)</sup>をバルト艦隊から任命するのが望ましい」[РГВА 9/29/145/46]と述べた。

2月1日、ガマルニクはスターリン、カガノーヴィチに「極東地方党委員会の書記たちと、労農監督人民委員部統制小委[КК РКИ]の代表の派遣を急いでほしい。彼らの不在は仕事に大きく影響している」[РГВА 9/29/145/50]と述べた。

2月11日、ガマルニクはヴォロシーロフに次の8点について打電した。以下に引用する。

- ① 機雷用の保管庫、機雷班のための収容施設は存在する。
- ② 機雷敷設艦として、港のタグボート、砕氷船、輸送船、トロリー船を改造する予定だ。これらの船の技術的点検は行われ、改造のプランも策定された。当地には必要な型の鉄がないので、海軍当局は甲板に敷設するため、約3000mのレールを送る必要がある。
- ③ 商船7籍を基本的な掃海艇として予定している。そのためには掃海用のウィンチと錨鎖孔を送る必要がある。
- ④ 舞鶴型の砲台のため、そして新たに到着した通信手段のため、距離計とサーチライトを至急送ることが必要である。貨物トラック、軽自動車もまた必要だが、電池は各地に送られた。
- ⑤ 砲兵隊が著しく増強されたので、ピョートル大帝湾で監視、通信業務を展開する必要がある。海上戦力当局は今すぐ器材とスタッフを割り当てる必要がある。
- ⑥ 潜水艦、魚雷艇、水上飛行機と魚雷作戦と関連したすべてのための基地の準備に今すぐ取りかかる必要がある。海上戦力には標準的な計画を立て、予算を確保するという課題を出してほしい。すべての必要なデータはカラチョフが持って行く。
- ⑦ ダリザヴォードの工場長はスターリンとあなたの指示を引用しつつ、海軍の施設とスタッフがウラジオストック港で占拠している3棟の建物の解放を要求している。本当だろう



か？これは軍部にとって多大な困難をもたらす。

- ⑧ ウラジオストックにおいて著しく増大する海軍の仕事を考慮し、ブリュッヘルの補佐役の立場で彼に直接従属し、海上防衛のすべて(沿岸・鉄道砲台、機雷、水上飛行機・魚雷艇の利用、監視・通信業務、新砲台と基地の建設、商船団の動員準備、[一語解読不能]、新しい潜水艦の受入と習得)を一手に統合しうる海軍の長官を今すぐ任命することが絶対に必要であり、参謀部の細胞と第1級ランクの軍港が必要である。砲兵大隊の指揮官がこれらの問題すべてを管轄することはできない[РГВА 9/29/145/60 и об., 61]。

2月16日、ガマルニクは海軍長官オルロフに、「機雷敷設艦の改造、装備に関するすべての課題は現地で発出され、計画は小艦隊の専門家たちによって作成された。あなたの方からは、必要な物資を送り、ダリザヴォードが実行している作業の支払いのためにクレジットを確保すること(軍港長[старморнач]への前金として)、改造を監督する機雷専門家をウラジオストックに派遣することが求められている。掃海艇はすでに報告した7隻ではなく、9隻を予定しており、この数に合わせたウィンチと錨鎖孔が必要となる。機雷敷設艦として動員される船舶や港についての詳細な情報はカラチョフが持って行く」[РГВА 9/29/145/66]。

3月1日、ガマルニクはオルロフに、次の5点を打電した。以下に引用する。

- ① 機雷敷設艦への改造と動員によって軍務に駆り出されたのは：ヴォロフスキー、ポヤルコフ、ハバーロフ、ダヴィドフ、ドブリニャと6隻のエリヴァン・タイプのいわゆる小舟[невки]である。基本的な掃海艇として予定しているのは、パトロクル、ゲルクレス、スラヴァンカ、ディアミド、ボスフォルとサハリン会社所属の250馬力の艀装されたタグボート4隻である。
- ② 小舟1隻(トボリスク)とサハリン会社によってダリザヴォードで艀装されたタグボート4隻を今すぐ、陸海軍事人民委員部に引き渡すことが必要だ。これらの船舶は平時であっても、戦闘訓練の遂行、スタッフのトレーニングに必要だ。
- ③ 第二の問題が肯定的に解決されるのであれば、トボリスクと4隻の掃海艇は、標準的な定員に沿って完全に水兵を補充すべきである。この他、どのような作業に着手したのか、第一点で列挙された船舶の艀装を観察すべく、経験豊かな水雷手を派遣することが不可欠である。
- ④ 動員で我々[軍]に引き渡された船舶での任務のため、ソヴトルグフロートがウラジオストックへ、信号手、無線通信士のグループを渡すことが有益だろう。
- ⑤ 詳細な情報はカラチョフが持って行く[РГВА 9/29/145/78 и об.]<sup>(79)</sup>。

3月17日、ガマルニクはスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに打電した。「デ・カストリへ飛行機で飛び本日、戻ってきたムクレヴィチ、メジス<sup>(80)</sup>が私に報告した：3月11日、沿岸

防衛のための物資の最後の貨物とスタッフを乗せた蒸気船エリヴァンがデ・カストリに來航した。この船の來航により、デ・カストリのために予定していたすべての部隊（第1師団の第4連隊と大砲小隊2個、それに沿岸防衛大隊3個）の集中が完了した。兵士たちは漁師やレソプロムホーズ〔製材業者〕の居住地を犠牲にして木製バラックや、テントに収容した。テントでは絶え間なく薪を炊いているため、十分暖かい。部隊には食料、飼料、制服、弾薬は完全に補給されている。けがや凍傷を負っている者はいない。意気軒昂である。木造の駐屯地の建設が始まり、最初のバラック12軒は5月初めに終わるだろう。沿岸砲台の構築にも着手され、測量が行われ、場所が最終的に選ばれた。道路が敷かれ、木材が準備され、最初の砲台のために穴が掘られた。砲台設置のための臨時の土台に定められた4月1日という期限は守られるだろうと、司令部と建設担当者はみなしている。作業は猛烈な吹雪と深雪によって人馬の移動が大きく妨げられ、困難を極めている。砲台のためには機械動力で特別の道路、すなわち樹木を切り払った空き地〔просеки〕を敷設する必要があるが、深雪と土壌の凍土が深いため、春になってから可能になるだろう〕〔РГВА 9/29/145/111 и об.〕。

3月24日ガマルニクは海軍長官オルロフに「ダリザヴォードは組み立てのため、9隻の船の受け入れを準備している。しかしここには中央の諸工場、特にバルト工場〔Балтийский завод、レニングラードの造船工場〕で何をやっているのかまったく何も情報がなく、仕事上の結合が何もない。必要な情報を集め、私に知らせてください：①極東へどの時期にボートが送られるのか？②基本的な設備、資材、ダリザヴォードとオシポフ修理所のための特別幹部はいつ、誰によって積み込まれ、発送されるのか？③建設する工場と組み立てる工場間の責任がどのように分担され、誰が船舶の建造と引き渡しに責任を持つのか？④この建造に関連して、それぞれの合同や契約当事者間に生じるすべての問題に専念し、この発注全体の工業側の遂行を責任をもって指導する特別な人間が重工業人民委員部に存在するのか？当地では、中央におけるこの事業全体に対する強力な指導が感じられない」と打電した〔РГВА 9/29/145/124〕<sup>(81)</sup>。

ここでガマルニクは、たんに船やボートと書いているが、潜水艦のことを指している。

3月25日ガマルニクはヴォロシーロフに打電した。

ウラジオストックで新たに建設されている沿岸砲台すべてを視察した。ヴォエヴォダ半島〔ルースキー島の西、ヴォエヴォダ湾に突き出た半島のことと思われる〕での旧型のカネーの砲台〔フランスのギュスターヴ・カネー（Gustave Canet, 1846-1908）はフランスの技師。カネー砲を設計〕は3月10日に設置が終了し、シコト半島〔エーゲルシェリドとして知られる、ウラジオストック市街地から南西に伸びる〕の同じタイプの砲台は3月14日に設置され、12榴弾砲は3月20日に設置された。これら三つはすべて一時的な設置である。ジトコフ半島とソーボリ湾〔バサルギン半島の付け根に位置〕の新型カネー砲は常置され、前者は3月25日に、後者は4月1日に完了する。バサルギン岬とストヴォールヌイにある砲台には追加的にマイヅル〔120 mm 砲をこのように呼んでいた〕の第4火砲が常置されたが、作業は10ヶ

月かけて終了した。すべての砲台はあなたが定めた期間以前に設置された。建設の指導者や機雷スタッフ全員は、必要な輸送手段、技術手段を持たずに毎日 14 時間、寒空の中で働き、特別なエネルギー、熱意を発揮している。中央から今日に至るまで器材以外は何も受け取っておらず、建設はおそろしく困難なものになっている。これから 3 日をかけすべての火砲を試射して砲台を点検することにしたので、結果についてはまた報告する。現在、建設に課せられている課題は、暴露砲台[открытая батарея]の第 2 工程の作業と、砲塔砲台に関する作業を全面的に展開することである。後者について、あなたの承認を得ていないが、当地では全工程の正確な一覧表も各砲台の設計図も戦術的技術的課題についても、何一つ受け取っていない。必要な機械設備(コンクリートミキサー、クレーン、ブルドーザーその他)が積み込まれたのかどうかについてのデータもない。これらがなければ、これほどの複雑な作業の実行はまったく不可能である。最短期間で砲塔砲台を建設する諸問題に関してすべてを明らかにし、必要不可欠なものすべてを最大限確保することが必要である」と打電した[РГВА 9/29/145/126 и об.]<sup>(82)</sup>。

3 月 30 日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「ウラジオストックで 3 月 27~28 日に、二つの新式砲台を除き、すべての沿岸砲台で試射が行われたが、結果は好ましいものだった。ジトコフでの新式砲台の設置は終了し、ソーボリ湾ではセメントの基盤構築が終了し、4 月 1 日には組み立てが終わる。これらの砲台の試射はセメントの凝固のあと行われるが、それには 10~14 日かかる」と打電した[РГВА 9/29/145/133]<sup>(83)</sup>。

4 月 5 日ガマルニクはオルロフに「ダリザヴォードは激務をこなせば 12 隻の潜水艦を建造できると思うが、オシポフ修理所の動員態勢を解除しないようにするためにも、そのようにすべきではないと考える。オシポフ修理所のための設備を納入する期限について、重工業人民委員部に強く圧力をかけねばならない」と打電した[РГВА 9/29/145/182]。この時期、ソ連当局は満洲と日本本土の連絡を絶つべく、潜水艦や魚雷艇の極東地方への配備に向けて着々と整備を進めていた[寺山 2022b]。

陸上部隊でも再編が進められていた。1 月 30 日、ガマルニクはハバロフスクのブリュッヘルに、「あなたが予定している 1932 年における 11 の大隊地区[батрайон]にザバイカル人[ザバイカル駐屯の部隊指揮官のことをさすものと思われる]は反対していない。沿海及びザバイカルの 1933 年のための全プログラムに関しては、2 月 1 日にハバロフスクで話を聞く予定だ」[РГВА 9/29/145/49]と述べた。

日付は不明だが 2 月初めのことと思われる。ガマルニクはヴォロシーロフに「グループの司令部の組織との関係で、平時の局[управление]の組織をブリュッヘル、ゴルバレフ[Горбалев]、プトナとともに検討した。アムール川の中流のためにのみ軍団の局を持つことを決めた。沿海とザバイカルでは軍団の局は置かない。司令部の定員構成は 68 人ずつとし、定員の計算は電信で伝える。プトナの参謀部はウラジオストック、ゴルバレフはチタに置くが、後者についてブリュッ

ヘル、ゴルバレフは地方の中心としてイルクーツクを主張したが、私がチタが不可欠だと見なし、検討の結果ブリュッヘル、ゴルバレフがチタに同意した」と打電した[РГВА 9/29/145/51]。

2月3日ガマルニクはヴォロシーロフに打電した。「大隊地区建設の全体プログラムを86まで拡大し、特にザバイカルでは、インスタンツィアによる15との決定に反し、大隊地区を37～39とするとのブリュッヘルは報告書は、私がウラジオストックに滞在中、私の関知しないところで送付された。ブリュッヘルが電報で私の同意を求めてきたので、私はボルジャ陣地を基礎に1932年のザバイカルにおける11大隊地区にのみ同意し、プログラム全体についてはハバロフスク帰還後に話そうと答えた。エゴロフがザバイカルについての考えを至急電で送れと要求したため、ブリュッヘルが私の参加なしに86の大隊地区についての自身の考えを提示した。昨日ブリュッヘルとこの問題を検討し、あなたの指示(Нр152/ш)と、シェレメティエフ[Шереметьев]が私に渡してくれたインスタンツィアの決定に従い、1932年には陣地を基礎に、ボルジャさえ含め、ブリュッヘルが主張したカイドونسコエ[ウランウデの南タルバガタイ地区にある村のことと思われる]の2地区を加え、ザバイカルで11の大隊地区を形成することとした。1933年を含むすべてのプログラムに関して私は、75の大隊地区、そのうちザバイカルには15大隊地区とし、測量後にわずかな修正しか認めないとする、インスタンツィアの決定及びあなたの指示(Нр152/ш)に厳格に従うようブリュッヘルに指示した」[РГВА 9/29/145/52-53]。

3月30日、ガマルニクはヴォロシーロフに「ブリュッヘルとともにグロデコヴォ地区を視察した。建設のための建設資材は近い将来は基本的に確保されている。たしかにルードウイ[中東鉄道支配人]<sup>(84)</sup>がいくつかの道具について我々を支援してくれたが、道具、機械の状況は悪い。今のところ輸送の状況は悪く、ヴァシレーヴィチ[Василевич]は数日中に中央から運ばれているトラック40台を受け取るだろう。経験豊かで基礎的・戦術的に詳しい技師・技術スタッフが足りない。しかし全体的には、仕事が断然よく手配されている条件のもとに建設は置かれている。沿岸防衛で私が見たのとは正反対で、建設のテンポは遅く、労働の組織化は唾棄すべきものである。ヴァシレーヴィチとスヴィチニン[Свичнин]をこっぴどく叱りつけ、多くの指示を出した」と打電した[РГВА 9/29/145/134]<sup>(85)</sup>。

### 3.11. 警察、コルホーズ軍団、北満委員会

極東地方の治安を維持するための警察、食料問題と軍事問題を両方解決する手段として設置されたコルホーズ軍団も問題となった。そしてガマルニクのモスクワへの帰還を前に浮上したのがハルビンを拠点とする北満委員会の問題だった。

2月9日にガマルニクはオゲペウのメンジンスキー(Менжинский, Вячеслав Рудольфович、1874-1934、オゲペウ議長)、アクーロフに「[[極東]地方の警察[ミリツィア]は極めて弱く、警察の哨所がハバロフスクに3カ所、ウラジオストックに7カ所、ブラゴヴェシチェンスクに3カ所あるのみで、極東地方全域に騎馬隊は34地点だけである。この地方に騎兵小隊5個を増設し、警察官の定員を500人増やすことが全く必要である」と考える」[РГВА 9/29/145/57]と打電した。

2月16日ガマルニクはヴォロシーロフに、「極東警察の増員を要請すべくインスタントツィアに提起するとヤゴダ[Ягода, Генрих Григорьевич, 1891-1938, オゲベウ議長代理]から連絡があった。この要請を断固として支持するようあなたにお願いする」と打電した[РГВА 9/29/145/64]。

日付は不明だが、内容から2月半ばに出されたものと考えられる。ガマルニクはヴォロシーロフに「極東地方の土地局長ヴァシレーヴィチ<sup>(86)</sup>は私に、極東地方への除隊赤軍兵士の自由意志に基づく移住を断念すると同時に、1932年春に約5万人の Колホーズ軍団を設立するとのあなたの計画をヤコヴレフが彼に知らせたと話してくれた。判断に生かすため、この計画の基本的な状況を教えてほしい。私としては本年は2師団(1万~1.5万人)程度にとどめ、以前中央委員会が目標としていた1932年の除隊赤軍兵士の自由な移住を維持すべきと考える」と打電した[РГВА 9/29/145/62]。

2月21日、ガマルニクはブリュッヘルと連名でヴォロシーロフの文書1882-IIIに返電した。「①極東地方における現地の建設資材(木材、レンガ)さえきわめて困難な状況にあることを考え、沿海とアムールに Колホーズ師団を2個、あなたの指示通り総勢2万人で形成するよう提案する。このうち8000人は、春の播種キャンペーンに、その後は建設に利用できるよう、極東地方に4月初めに到着すべきである。木材やレンガの他に建設シーズンの始まりまでには中央から残りの資材を運び込むことが必要である。②あなたの電報からは、除隊赤軍兵士の自由意志に基づく移住策が今後も維持されるのかどうか不明である。経済的にも効果が実証され、兵役義務者の良き幹部を供給してくれるので、これを維持すべきだと我々は考えている。1932年にはこの方針で中央から1万家族を移住させることが不可欠である」[РГВА 9/29/145/69]<sup>(87)</sup>。

3月3日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「受け入れ準備の時間を失わないよう、 Колホーズ部隊と除隊赤軍兵士の移住に関する問題の決定を急ぐようお願いする」と打電した[РГВА 9/29/145/81]<sup>(88)</sup>。

4月17日ガマルニクはスターリンに「北満洲委員会が従事していたこと、しかも愚かにもまったく許し難い行為に従事していたことを、ここ数日で明らかにした。ベルガヴィノフが確証していることだが、北満洲委員会のこの活動路線は彼が極東地方党委員会書記に就任する前からあったとのことだ。昨日詳細に調査して明らかになったことは、北満洲委員会のこの活動に責任があるのは極東地方党委員会の特別トロイカで、(私が極東に来訪する前の)1月初めに北満洲委員会の報告を聞き、この活動を禁じるどころか、それを継続するようにとの誤った、無責任で軽率な決定を行った。①今後、正しい指導が行われるいかなる保証もないので、北満洲委員会に対する指導の権限を極東地方党委員会からすぐに取り上げること、②北満洲委員会の書記を解任し、大きな仕事を担うことのできる政治的に信頼でき、責任感の強い人物を代わりに任命すること、が不可欠だと考える。この電報の内容について私はベルガヴィノフ、ブリュッヘルにも話した」と打電した[РГВА 9/29/145/167]<sup>(89)</sup>。これを受けて、翌4月18日にスターリン、モロトフが連名でハバロフスクに指示を出した[寺山 2005 : 91-92]。

#### 4. ガマルニクの健康問題、モスクワへの帰還

ガマルニクは健康に問題を抱えていた。多忙を極める中で3月1日、ガマルニクはレヴィチェフに、「元気だ。気分は良い。来訪〔приезд〕には断固反対する」と書いた〔РГВА 9/29/145/77〕<sup>(90)</sup>。健康を案じた妻の極東への来訪を断るという意味だろうか？これに続いて、3月23日、ガマルニクは同じくレヴィチェフに「電報を受け取ってなかった。まったく健康で、モスクワには5月半ばには戻っているつもりだ」と打電した〔РГВА 9/29/145/122〕<sup>(91)</sup>。

4月5日ガマルニクはヴォロシーロフに「リトゥノフスキー<sup>(92)</sup>を通したフィリッポヴィチ<sup>(93)</sup>のモスクワの医者たちに対する問い合わせに特別な注意を払わないようお願いする。仕事は中断せず、数日たてばインフルエンザは治り、健康は取り戻せると考えている。4月15日頃には、ゴルバチョフ<sup>(94)</sup>の諸部隊とサゾントフ<sup>(95)</sup>の作業を視察すべくザバイカルに出兵することを考えている」と打電した〔РГВА 9/29/145/179〕。

そして翌4月6日ガマルニクはイルクーツクのレオーノフ東シベリア地方党委員会書記に「〔中央委員会〕総会の期間についての君の〔電報〕を受け取った。病気になったのでハバロフスクを出発するのは4月13日よりあとになる」、同じく4月6日東シベリア地方ソビエト執行委員会議長ジージンにも「病気になったので、ハバロフスクを出発するのは4月13日よりあとになる」と打電した〔РГВА 9/29/145/144 н об.〕。

4月12日ガマルニクはモスクワのスターリン、モロトフ、ヴォロシーロフに打電した。「次のような今後の活動プランに皆さんの賛同をいただきたい：4月20日各人民委員部全権代表の小委の活動を終了、その後東シベリアへ行き約15日間活動、5月5～10日にモスクワに向けて出発」（原文では5月12日と誤記）〔РГВА 9/29/145/189〕。この間、4月15日にスターリンはガマルニクに、出発は5月5日ではなく4月20日にすべきと指示し〔寺山 2020：46〕、4月19日ガマルニクがスターリンに「状況との関連で、私はハバロフスクに数日残るべきではないだろうか？今の健康状態ならそれも可能である」と打電した〔РГВА 9/29/145/168〕<sup>(96)</sup>とて、4月19日にスターリンは出発を延期しないよう打電した〔寺山 2020：46〕。

結局4月22日、ガマルニクはヴォロシーロフに、「本日ハバロフスクを出発し、サゾントフのところで丸1日過ごし、イルクーツクに行き、5月5日ごろモスクワに到着する予定だ」と打電した〔РГВА 9/29/145/178〕。

#### 5. おわりに

以上のような経緯で1932年4月末にガマルニクは極東を出発し、モスクワに帰還した。4ヶ月という短期間の間に膨大な量の仕事をこなしていたことが理解できよう。ガマルニクが1920年代に極東地方のソヴィエト組織、党組織の中心的人物として様々な問題に取り組んだ経験が生かされたのは間違いなかろう。電報に出てくる氏名の経歴を調べることで、表面には出てこない

様々な人材が極東問題に取り組んでいた実態も明らかにできた。

本稿では生の電報を紹介する形で叙述を進めたが、単発的な内容で問題の背景を理解するには材料が少ない。それでもガマルニクとモスクワのスターリンら国政の最高指導部の間でなされたやり取りを見ていく中で、諸問題に対どのような方法で対応していたのかについて明らかにできたのではないかと考える。

謝辞：本稿のもとになった史料は、主としてマイクロフィルムの形で受領したが、手書き史料も多く解読に大きな困難を伴った。いつもの通り、ノヴォシビルスクのセルゲイ・パプコフ教授には筆者の質問に快くご助言いただいた。ここに記して謝意を表したい。

## 注

- (1) この文書のコピーは、ガマルニク、モロトフにも送付された。
- (2) レヴァンドフスキー（Левандовский, Михаил Карлович, 1890-1938）はポーランド人で、当初エスエルに所属していたが、1920年1月にロシア共産党に入党した。革命後主に北カフカースの軍で活動、1920年代にはウクライナ、トゥルケスタン、カフカースで活動、1928年10月労農赤軍管理総局長、1929年12月よりシベリア軍管区司令官、1933年12月よりカフカース赤旗軍司令官、1935年再編されたザカフカース軍管区司令官、1937年6月特別赤旗極東軍沿海グループ司令官を務めた。1938年2月23日に逮捕され、7月29日処刑される〔Черушев Н.С. и Ю.Н. 2012:33-34〕。
- (3) シブコンバインは農業コンバイン製造のため1930年からノヴォシビルスクで建設が始まった工場。1931年の収穫時に初号機が試運転されたが、1932年初頭からコンバインではなく、繊維産業のための機械製造を始めた〔Кашицин 2010〕。飛行機工場への転換も検討していたわけだが、結局そのような転換はなされなかった。
- (4) アルクスニス（Алкнис, Яков Иванович, 1897-1938）はラトビア人で1916年9月に入党、第一次世界大戦に将校として従軍、革命後1919年5月に労農赤軍に加わり内戦を戦う。軍事アカデミー卒業後の1924年より参謀部に勤務、1926年8月より労農赤軍空軍司令官代理、1929年7月モスクワ・セヴァストポリ間の記録的飛行を達成、1931年6月より空軍司令官、1937年1月よりソ連国防人民委員代理、1937年11月23日逮捕、1938年7月29日処刑される〔Черушев Н. С. и Ю. Н. 2012:22-23〕。なお ВВС（Военно-воздушные силы）を空軍、そのトップの начальник を長官と訳した。
- (5) ゴリツマン（Гольцман, Абрам Зиновьевич, 1894-1933）は、1933年9月5日にモスクワの飛行機事故で死去。全ソ民間航空合同議長（1930～33年9月5日）のほか、党中央統制委員会幹部会メンバー（1930年7月13日～32年2月4日）でもあった（[www.knowbysight.info/GGG/02102.asp](http://www.knowbysight.info/GGG/02102.asp)。2022年11月19日アクセス）。
- (6) シベリアにおける穀物調達状況についてルズタクは、1931年2月1日スターリンに報告している〔Кондрашин 2011: No. 213〕。
- (7) ジーミン（Зимин, Николай Николаевич, 1895-1938）は、党中央統制委員会メンバー（1930年7月～34年1月）であるとともに、東シベリア地方ソヴェト執行委員会議長（1931年2月～32年10月）を務めていた（[www.knowbysight.info/ZZZ/02735.asp](http://www.knowbysight.info/ZZZ/02735.asp)。2022年11月19日アクセス）。
- (8) ガーリン（Гарин, Владимир Николаевич, 1896-1940）の本名はジェベネフ（Жебенеф, Иван Николаевич）で、1930年8月から1931年11月にかけて東シベリア地方オゲベウ全権代表代理を務め、その後北カフカース地方、タタル共和国と転勤し、内務人民委員部レニングラード州局長代理時代に大規模なテロルに関与した（[www.knowbysight.info/GGG/12504.asp](http://www.knowbysight.info/GGG/12504.asp)。2022年11月19日アクセス）。
- (9) この時期のザバイカルの状況について、例えば〔Соловьев 2002〕を参照のこと。
- (10) バラーノフ（Баранов, Пётр Ионович, 1892-1933）については、<[www.knowbysight.info/BBB/10246.asp](http://www.knowbysight.info/BBB/10246.asp)>（2022年11月19日アクセス）を参照のこと。
- (11) 当時のシベリア鉄道の東部区間は東から西へウスリー、ザバイカル、トムスク、オムスク鉄道の順に配置されていたが、〔寺山 2022a〕に掲載されている地図を参照のこと。
- (12) キシキン（Кишкин, Владимир Александрович, 1883-1938）はこの前に、ソ連オゲベウ輸送部長を短期間（1931年10

- 月7日～17日)務めていた[Петров и Скоркин 1999: 231-232]。
- (13) ベルガヴィノフ(Бергавинов, Сергей Адамович, 1899-1937)はスモレンスク県生まれ、1917年3月入党、ウクライナ、アルハンゲリク、北方地方等の党書記を務めたあと、この時期極東地方党委員会第一書記(1931年7月～33年3月)を務めていた([www.knowbysight.info/BBV/01362.asp](http://www.knowbysight.info/BBV/01362.asp), 2022年11月19日アクセス)。
- (14) ブツェンコ(Буценко, Афанасий Иванович, 1889-1965)はハリコフ県生まれ、1909年入党、おもにウクライナで活動、ハリコフ管区ソヴィエト執行委員会議長等を務めた(1928～29年)あと、この時期極東地方ソヴィエト執行委員会議長(1931年9月～33年3月)を務めていた([www.knowbysight.info/BBV/01660.asp](http://www.knowbysight.info/BBV/01660.asp), 2022年11月19日アクセス)。
- (15) ダリストロイ(Дальстрой)は、コリマ川上流の金採掘強化のため、1931年11月11日のソ連共産党中央委員会政治局決定[РГАСПИ 17/162/11/48, 57-63]で形成された特別トラストの通称。
- (16) この文書に日付はなかったが2月16日に暗号が解読されていたため、発送日もそれに合わせた。
- (17) デリバス(Дерибас, Терентий Дмитриевич, 1883-1938)については、以下を参照のこと。<[www.knowbysight.info/DDD/02394.asp](http://www.knowbysight.info/DDD/02394.asp)>(2022年11月19日アクセス)、[Петров и Скоркин 1999: 173-174]。
- (18) この文書は、1932年3月6日12:00に暗号解読された。
- (19) 電報は「極東地方オゲベウ全権代表を通じて送られた」とある。また「コピーはイルクーツクの〔東シベリア〕地方党委員会、アンツェロヴィチにも送付」された。
- (20) この文書は、1932年3月15日13時に暗号解読された。
- (21) ラトチェンコ(Радченко, Андрей Фёдорович, 1887-1938)はチェルニゴフ県生まれ、1904年入党、何度も逮捕される。内戦時には南部戦線やウクライナで活動、ウクライナ党中央委員会メンバー(1923～30年)、その後イワノヴォ州計画部長(1929～31年)、ツェントロソユーズ議長代理(1931～32年)、全ソ合同ザゴリオン(亜麻の調達組織)長官(1932～37年)を務めた。1937年7月9日逮捕、18年1月銃殺された([www.knowbysight.info/RRR/04398.asp](http://www.knowbysight.info/RRR/04398.asp), 2022年11月19日アクセス)。
- (22) 文書には、4月21日16時20分に暗号解読されたとあるが、内容からこの電報は3月21日に発出されたものと判断した。
- (23) この文書のコピーはイルクーツクの東シベリア地方ソヴィエト執行委員会議長ジーンにも送られた。また、この電報はオゲベウを通して渡された。革命軍事会議議長代理(すなわちガマルニク)の秘書ミンチュークが、ウスリー地区オゲベウ輸送部長に、この電報をオゲベウの電信を使って至急送るように依頼した[РГВА 9/29/145/157]。
- (24) ゴインキス(Гойнкис, Павел Густавович, 1889-1961)はソスノヴェツ(現在のポーランド、シレジア)のドイツ人商人の家庭に生まれるが、9歳で孤児となり孤児院で教育を受ける。1907年ワルシャワの実業学校を卒業、クロンシタットの海上技師学校に入学、1913年ニコライ海軍アカデミーに入学、第一次大戦時には造船工場に勤務、革命後、1918年にはバルト工場の造船設計局を指導、1920年から海軍アカデミーで教鞭をとる。1928～30年海軍造船学科長、1929年まではバルト工場の技師長として活動、そこで電気溶接梁(桁)の試験製造を組織、1931年に初めて潜水艦のための電気溶接間仕切りを作ることができた。1930年10月2日、いわゆる産業党事件で逮捕、31年4月30日死刑判決、10年ラーゲリに変更、バルト工場のオゲベウの ОКТБ-2[опытно-конструкторское техническое бюро、試作技術局。Шяляр-сика шарашка と呼ばれ、自由を奪われた科学者が働く研究施設の一つ]に勤務、極東へのシチューカタイプの潜水艦の鉄道輸送に関する技術開発に従事した[Сойко 2005: 20]。1932年1月2日、禁錮は執行猶予に変更される(<https://arch2.iofe.center/person/10149>, 2022年11月19日アクセス)。1932年2月、ベルムスコエ村での造船工場建設選定小委のメンバーに選出、その後ハバロフスクに派遣、統合極東造船工場ヴォストクソユーズヴェルフィ(Востоксоюзверфи)の技術部門長代理となり、1933年よりウラジオストックのグリザヴォードの技術部門長となった。1934年、太平洋艦隊のための造船成功に対して勤労赤旗勲章を受けた[РГАСПИ 17/3/938/12-14]、1935～36年海上船舶総局の技師長。1936年3月29日重冶金工業人民委員部の命令で再度、コムソリスク・ナ・アムーレのアムール造船工場の技師長、工場長代理として極東へ。工場では JL-11 シリーズの最初の潜水艦を建造中、駆逐艦嚮導艦(лидер эскадренных миноносцев)キエフも。嚮導艦本体は、ニコラーエフの第198造船工場で作られ、鉄道と船舶でコムソリスク・ナ・アムーレへ。嚮導艦進水2週間前の1938年7月11日逮捕、10年の判決、レニングラードの特別刑務所 No. 8 に勤務。1941年8月各地で勤務。
- (25) この暗号電報は翌2月20日4時に解読された。本電報の裏面には、「私やムクレーヴィチとともにベルムスコエ訪問に大きな意欲を見せていたが、ブリュッヘルは同行しなかった。現在彼がハバロフスクを数日留守にするのは全く不可能だと私が考えたからである」とガマルニクが記している[РГВА 9/29/145/68об.]。
- (26) ロマノフについて特定できていない。[Черновасв 2008: 695]の注釈によれば Романов М. В. として「シベリア極東鉄道総局長代理(?)」とあるが、後述する通り、鉄道とは関連ない仕事に従事していた可能性が高い。スターリンとはこのあと、1932年4月9日(他に13人が同席)、4月14日(他に13人が同席)、9月3日(5分のみ、ガマルニク、カラハンと一緒に退室)の3回面会している[Черновасв 2008: 65, 66, 70-71]。



- (27) ゴルブーフは、[Черноваев 2008 : 597] の注釈によれば、飛行機設計者の(Горбунов, Владимир Петрович, 1903-1945)としている。その後スターリンとは 1939 年 6 月 20 日に面会しただけである。彼には一歳上の兄セルゲイ(Горбунов, Сергей Петрович, 1902-1933)がおり、モスクワ郊外のフリリにあった第 22 飛行機工場長を務めていたこと、弟は 1931 年にモスクワ航空大学を卒業したばかりだったため、ゴルブーフとはこの兄のことであった可能性もある。
- (28) パヴルノフスキー(Павлуновский, Иван Петрович, 1888-1937)は、1930 年 7 月から 1932 年 2 月 4 日まで党中央統制委員会メンバー、ソ連ヴェセンハ幹部会メンバー(1930~32 年)を務め、1932 年からはソ連重工業人民委員代理となった([www.knowbysight.info/PPP/05551.asp](http://www.knowbysight.info/PPP/05551.asp), 2022 年 11 月 19 日アクセス)。
- (29) シュルギン(Шулгин)について特定できていない。[Черноваев 2008 : 739] の注釈も、シュルギン(Шульгин В. Н. ロシア共和国教育人民委員部参事会メンバー?)の可能性があるとされているが、別の人物だろう。
- (30) 文書の裏側には補足説明として、「ストルクネルから。25 日にはブラゴヴェシチェンスクに向かう。ハバロフスクには 2 月 29 日に戻る」とある。1932 年 2 月 25 日 5 時に暗号解読された。
- (31) コステンコ(Костенко, Владимир Полиевктович, 1881-1956)は海軍技師学校を卒業後、日露戦争にも参加、日本軍の捕虜となる(ノヴィコフ・プリボイの小説『ツシマ』でワシリエフ技師)、帰国後ヴィッカーズに発注したリューリック建造の視察に英国へも出張、エスエルでの革命活動で 1910 年に逮捕されるが翌年釈放、1912 年より黒海造船会社に勤務したが、革命後も様々な造船企業に勤務する。1928 年に逮捕され、29 年にソロヴェツキー・ラーゲリへ、その後ハリコフ、レニングラードのオゲバウの特別ビューローで勤務し、1931 年に解放される。1932~41 年に極東の造船工場建設を指揮する。1941 年 2 月に再度逮捕、42 年 7 月に釈放される。1931 年から死ぬまで造船研究所「プロジェクトヴェルフ」の指導者の一人だった([gazeta.ru/19-sentyabrya/korablestroitel-ushenyiy-talant.htm](http://gazeta.ru/19-sentyabrya/korablestroitel-ushenyiy-talant.htm), 2022 年 11 月 19 日アクセス)(История и культура Приамурья, 2 (14) 2013)。
- (32) 本文書の冒頭に「すぐに暗号解読すること」とある。4 月 4 日 19 時に暗号解読された。
- (33) 本文書は、1932 年 4 月 10 日 17 時 30 分に暗号解読された。
- (34) 本ファイル内の文書は時間を追って並べられているが、日付不明の本文書の前の文書の日付が 1 月 23 日となっているため、本文書は 1 月 23 日以降に発出されたものと判断している。
- (35) バズレヴィチ(Базилевич, Георгий Дмитриевич, 1889-1939)はチェルニゴフ県生まれ、ギムナジアとキエフ軍学校卒業後、将校としてロシア軍に勤務、第一次大戦中の軍功で 8 度表彰される。1918 年 3 月より労農赤軍に加わる。内戦中に各地で指揮を執る。1925 年 11 月モスクワ軍管区司令官、1927 年 5 月沿ヴォルガ軍管区司令官、1931 年 4 月ソ連ソヴナルコム附属国防小委(1937 年にソ連ソヴナルコム国防委員会に改組)書記、1938 年 11 月 23 日逮捕、1939 年 3 月 2 日死刑判決、同日執行[Черушев Н.С. и Ю.Н. 2012 : 57-58]。
- (36) 本文書は、1932 年 3 月 24 日 18 時 30 分に暗号解読された。
- (37) 文書に日付はなかったが、1932 年 4 月 2 日 20 時に暗号解読されたとあるので、同日の発出と判断した。
- (38) 暗号が解読されたのも同じ 1 月 22 日である。
- (39) レヴィチエフ(Левичев, Василий Николаевич, 1891-1937)は、1914 年から 18 年にかけてロシア軍、19 年 4 月より赤軍に加わる。労農赤軍総局長(1925~28 年)、第二狙撃軍団司令官(1928~29 年)等を経て、1930 年より労農赤軍参謀部長代理、『軍事通報』責任編集者(ともに 1933 年 1 月まで)、駐独全権代表部軍事アタッシュエ(1933 年 1 月~34 年 5 月)、労農赤軍参謀本部長代理(1934 年 12 月~37 年 6 月)を務めた。1937 年 6 月 5 日逮捕、11 月 26 日銃殺された([www.knowbysight.info/LLL/03815.asp](http://www.knowbysight.info/LLL/03815.asp), 2022 年 11 月 19 日アクセス)。
- (40) マルティノヴィチ(Мартинович, Ксенофонт Филиппович, 1894-1937)は、ミンスク出身で、1927 年には中央委員会メンバーとなる(1934 年まで)。1929 年より労農監督人民委員部の海軍監督部長代理の任にあったが、その後の経歴は不明で 1937 年 9 月に逮捕されたときは、ソ連国防産業人民委員部第 4 総局長だったので、この文書の時点では、労農監督人民委員部か重工業人民委員部に所属していたのではないと思われる。1938 年 4 月 8 日に処刑される([www.knowbysight.info/MMM/08174.asp](http://www.knowbysight.info/MMM/08174.asp), 2022 年 11 月 19 日アクセス)。
- (41) 本文書は、1932 年 3 月 11 日 12 時に暗号解読された。
- (42) ルカーシン(Лукашин, Сергей Лукьянович, 1885-1937)は 1905 年に入党、1910 年に亡命から帰国、革命時にはペトログラードで活動、その後ドン、アルメニアで 1920 年代は活動、1928~30 年にソ連労働国防会議附属建設小委員長、1930 年 2 月~32 年 1 月ソユーズストロイ長官兼ソ連ヴェセンハ幹部会メンバー、1932 年 1 月~34 年 6 月ソ連重工業人民委員部全ソ合同「ツェントロソユーズストロイ」支配人、1935~37 年ソ連重工業人民委員部建設資材総局長などを務め、1937 年 8 月逮捕される([www.knowbysight.info/LLL/04106.asp](http://www.knowbysight.info/LLL/04106.asp), 2022 年 11 月 19 日アクセス)。
- (43) 本文書はオゲバウ全権代表を通して渡された。また、コピーは労農監督人民委員代理アンツェロヴィチにも送付された。
- (44) 本電報はオゲバウの全権代表を通して渡された。
- (45) スミルノフ(Смирнов, Николай Иванович, 1893-1940?)のことだと思われる。彼は 1912 年に入党、『ベドノター』『ク

- ドーク『労働者新聞』などの編集に従事、ソ連郵便通信人民委員部参事会メンバー（1928～31年11月）、同人民委員代理（1930～31年11月）を務めていた。その後ソ連労働人民委員部学術研究組織局長（1932～33年）、国立児童出版（1933～34年）に勤めたが、1937年11月逮捕、1940年2月に解放されたあとの経歴が不明である（[www.knowbysight.info/SSS/13240.asp](http://www.knowbysight.info/SSS/13240.asp)。2022年11月19日アクセス）[Кулешов 2009]。
- (46) 文書に日付はなかったが、1932年1月17日に暗号解読されたとある。
- (47) ブーリン(Булин, Антон Степанович, 1894-1938)は1914年に入党、1918年より各部隊で軍事コミッサールを務める。西部戦線政治部長代理(1923～24年)、モスクワ軍管区政治部長(1924～28年)、労農赤軍政治局長代理(1928～35年)、ベラルーシ軍管区政治部長(1935～37年)を務めた。1937年11月逮捕され、1938年7月28日処刑された([www.knowbysight.info/BBB/01621.asp](http://www.knowbysight.info/BBB/01621.asp)。2022年11月19日アクセス)。
- (48) 1932年3月20日2時に暗号解読されたとあり、この前日発出されたものと判断した。
- (49) 本文書は、1932年3月28日18時に暗号解読された。
- (50) デグチャリヨフ(Дегтярёв, Леонид Сергеевич, 1894-1937)の1932年3月時点での肩書きがはっきりしない。彼は内戦中にウクライナで活動、1927年6月～28年4月にウクライナ軍管区政治部長、同革命軍事会議メンバー、1927年11月～30年6月ウクライナ中央委員会メンバー、赤い星編集部次長、労農赤軍政治部プレス部長、国立国家出版社長、ロカーフ(Локаф)編集長、1933～34年エカチェリーナ鉄道政治部長、1934年1月～37年1月ウクライナ中央委員会メンバー、1936年カガノーヴィチ鉄道政治部長、鉄道輸送学術研究所次長、1937年12月逮捕、1940年2月処刑される([www.knowbysight.info/DDD/04756.asp](http://www.knowbysight.info/DDD/04756.asp)。2022年11月19日アクセス)。
- (51) 本文書は、1932年3月30日14時20分に暗号解読された。
- (52) ドレツキー(Долецкий, Яков Генрихович, 1888-1937)の本名はフェニグンティン フィニグштейンで、ポーランド王国・リトアニア社会民主党(1904年～)、ロシア社会民主労働党(1906～)メンバーでもあった。革命後リトアニア、ベラルーシ共産党のメンバー等を務め、1921～25年にはロスタ(ロシア共和国教育人民委員部政治啓蒙総委員会附属ロシア通信社)責任書記、1925年7月～37年6月タス(ソ連ソヴナルコム附属ソ連通信社)責任書記を務めた。1937年6月19日自殺した([www.knowbysight.info/DDD/02456.asp](http://www.knowbysight.info/DDD/02456.asp)。2022年11月19日アクセス)。
- (53) 4月1日14時に暗号解読された。
- (54) 本文書に日付は書かれていないが、1月17日に暗号解読されている。
- (55) この文書は1月18日に暗号解読された。
- (56) この文書自体に日付はないが、暗号解読されたのは1月18日である。
- (57) 2月25日2時に暗号解読されており、2月24日に発出されたと判断した。
- (58) プトナ(Путна Витовт Казимирович, 1893-1937)は1915年より従軍、1917年2月に入党し、赤軍には1918年4月に加わる。内戦後中国への軍事顧問団(1924～25年)、労農赤軍軍事教育施設局長代理(1925～27年)、駐日(1927～28年)、駐フィンランド(1928～29年)、駐独(1929～30年)全権代表部軍事アタッシュェとして勤務、特別赤旗極東軍第14軍団司令官・コミッサール(1930～32年)、同沿海グループ軍司令官(1932～34年)、駐英全権代表部軍事アタッシュェ(1934～36年)を務めた。1936年8月20日逮捕、1937年6月12日銃殺された(<http://www.knowbysight.info/PPP/04366.asp>。2022年11月19日アクセス)。
- (59) 本文書は、3月26日20時に暗号解読された。さらに補足情報として、「オゾーリンへ。暗号の送り先:3月27日までバムストロイ、ニコリスク・ウスリースク、3月30日までウラジオストック、31日以降ハバロフスク」とあり、ガマルニクの活動場所を示している。
- (60) 本文書は、3月28日14時45分に暗号解読された。
- (61) アンニン(Аннин, Николай Петрович, 1899-1959)はクロンシタット生まれで1918年8月に赤軍に、1920年より海軍に入る。海軍アカデミーで学び(1922年2月～28年8月)、アムール小艦隊に勤務し、1929年には奉天戦争に参加した。1931年4月にアムール小艦隊参謀部長となり、1932年4月から1935年1月には極東海軍参謀部作戦部長を務めた。スペイン内戦従軍(1936年9月～37年8月)後も海軍に勤務した(<https://proza.ru/2018/07/31/243>。2022年11月19日アクセス)。
- (62) この文書は1月18日に暗号解読された。
- (63) ソロンニコフ(Солонников, Орест Сергеевич, 1897-1938)は第一次大戦にも従軍し、革命後バルト艦隊、ドニエプル川小艦隊などに勤務、その後中央の参謀部に勤務していたが、この時に極東へ派遣されることになった。1937年7月26日に逮捕され、1年後の1938年7月26日スターリンによって第1カテゴリーのリストに入り、7月29日に処刑判決、同日に執行された[Зайцев и Близначенко 2013]。
- (64) 本文書は2月28日23:50に暗号解読された。さらに「オゾーリンへ。ハバロフスクには3月2日に戻った」とあり、本文書の最後に「返事がある」と記されている。

- (65) 本文書は、3月6日4時に暗号解読された。
- (66) ゴプについては次の論文を参照のこと[Близниченко 2017]。ゴプはチェコ人で1917年6月にレーニンのフィンランドへの逃亡を助け、1920年代にはロシア海軍の長官を務めていた。
- (67) カラチョフ(Калачёв, Владимир Петрович, 1896-1938)のこの時の肩書は不明である。肅正時の肩書きは、海軍参謀部長代理だった[Хаустов 2011: 144-151]。
- (68) 本文書は3月5日23時50分に暗号解読された。
- (69) 本文書は、4月16日19時に暗号解読された。
- (70) 暗号解読されたのも同じ1月21日である。
- (71) ロバチョフ(Лобачёв, Иван Степанович, 1879-1933)は、これより前の1925年からフレボプロダクト(Хлебопродукт)取締役会議長を務めていた。フレボプロダクトとは、「穀物及びその他の農産物取引株式会社」を正式名称とし1927年に解散していた([www.knowbysight.info/LLL/13286.asp](http://www.knowbysight.info/LLL/13286.asp), 2022年11月19日アクセス)。
- (72) 本文書は、3月15日20時30分に暗号解読された。
- (73) 「[極東]地方外国貿易を通じて至急暗号で」、とある。
- (74) 「オゲペウ全権代表を通じて暗号で至急送付」、とある。また最後に、「ガマルニク同志の命令により、暗号解読後、地方党委員会の暗号部を通して、逆に戻すようお願いする」とある。
- (75) 本文書は、3月18日19時に暗号解読された。
- (76) 本文書は、オゲペウの全権代表を通じて渡された。
- (77) 本文書のコピーはソ連供給人民委員ミコヤンにも送付された。
- (78) ムシノフ(Мушнов, Иннокентий Степанович, 1889-1962)は、1932~33年にバルト海海軍力沿岸防衛司令官兼コミッサール、1933~37年にクロンシタット強化地区司令官兼コミッサールを務めた(Мушнов Иннокентий Степанович // ЛНВМУ / НВМУ <[http://nvmu.ru/archiv/2/n\\_11/8538.htm](http://nvmu.ru/archiv/2/n_11/8538.htm)> 2022年11月19日アクセス)。したがって極東には来なかったことになる。
- (79) 本文書は、3月1日24時に暗号解読された。
- (80) メジス(Мезис, Август Иванович, 1894-1938)はラトヴィア人、1912年入党、内戦後軍の政治部門に勤務、1927年ウクライナ軍管区政治部長代理、1928年5月シベリア軍管区政治部長代理、1929年2月同政治部長、1930年10月特別赤旗極東軍政治部長、1933年8月沿ヴォルガ軍管区政治部長、1937年11月逮捕、38年4月21日処刑された[Черушев Н.С. и Ю.Н. 2012: 49-50]。
- (81) 本文書は、3月24日11時50分に暗号解読された。
- (82) 本文書は、3月25日3時に暗号解読された。
- (83) 本文書は、3月30日17時に暗号解読された。
- (84) ルードウイ(Рудый, Юлий Викентьевич, 1887-1938)は鉄道に勤務していたが革命活動のため何度か解雇される。1917年3月ベルミ鉄道ヴェレシチャーギン区間執行委員会議長、同年7月ベルミ鉄道総委員会議長、17年11月~18年10月ベルミ鉄道コミッサール長、18年入党、1920~30年交通人民委員部参事会メンバー、同総務局コミッサールその他の職務を務める。1925~25年鉄道輸送中央局長、1928年5~9月交通人民委員代理、1930~35年中東鉄道支配人、1935~37年交通人民委員部学術評議会議長、1937年逮捕、38年2月処刑(以上の情報は、2022年11月19日に次のサイトで得た情報だが、2023年2月現在アクセスできない。Рудый Юлий Викентьевич // Свободная энциклопедия Урала)。
- (85) 本文書は、3月30日17時に暗号解読された。
- (86) ヴァシレーヴィチ(Василевич, Иван Антонович, 1894-1937)は、1930~31年にソ連農業人民委員部に勤務し、1932年から極東地方農業部長を務めていた([www.knowbysight.info/VVV/04467.asp](http://www.knowbysight.info/VVV/04467.asp), 2022年11月19日アクセス)。これより前、1927年9月から1930年10月にかけて、ベラルーシ党中央委員会第二書記であったことから、陸海軍事人民委員代理になる前にベラルーシ党委第一書記だったガマルニクの部下だったことになる。
- (87) 本文書は、2月21日24時に暗号解読された。
- (88) 本文書は、3月3日22時に暗号解読された。
- (89) 本文書の冒頭には「すぐに暗号解読すること」と記されている。4月17日16時に暗号解読された。
- (90) 本文の日付は2月1日だが、3月1日に暗号解読されたとあるので本文の方の誤りだと判断した。
- (91) 本文書は、3月23日19時30分に暗号解読された。
- (92) リウノフスキー(Лигуновский, Василий Николаевич, 1889-1937)はベラルーシ人、若くして革命運動で逮捕されるがギムナジウム卒業後、モスクワ大学、ペトログラード大学で学び第一次大戦に従軍、1919年10月エスエルより共産党に入党、内戦後第一騎兵軍、北カフカース軍管区等に勤務する。軍事顧問として中国にも派遣された。1926年4月

- より陸海軍人民委員部に勤務、1928年3月より同総務部、1932年3月より同総務部長、フルンゼ軍事アカデミー、狙撃連隊長などを経て、1936年9月赤軍参謀本部第5部長、1937年5月逮捕、7月に取調中に死去〔Черушев Н.С. и Ю.Н. 2014：143-145〕。
- (93) フィリッポヴィチ (Филиппович, Сергей Густавович, 1897-1968)は1920年軍医アカデミーを卒業、内戦後赤軍に勤務、軍医アカデミーでも教鞭を執り、モスクワ軍病院に勤務、1938年3月逮捕され、1939年9月矯正収容所8年の判決を受ける〔Черушев Н.С. и Ю.Н. 2014：482〕。1937年のガマルニク自殺後に現場に呼ばれた。
- (94) ゴルバチョフ (Горбачев, Борис Сергеевич, 1892-1937)はベラルーシ人、1917年2月入党、第一次大戦に従軍、内戦、対ポーランド戦争に参加、フルンゼ軍アカデミー、北カフカース軍管区、第12騎兵師団、第7サマラ騎兵師団、クレムリンの軍学校長、モスクワ軍管区勤務を経て、1932年1月特別赤旗極東軍ザバイカル軍グループ司令官、1933年12月モスクワ軍管区司令官補佐(1935年より司令官代理)、1937年3月ウラル軍管区司令官、1937年5月3日逮捕、7月3日処刑〔Черушев Н.С. и Ю.Н. 2012：71-72〕。
- (95) サヴন্তフ (Сазонтов, Андрей Яковлевич, 1894-1938)はヴャトカの実業学校を学費不足で卒業できず、1911年ハバロフスクに向かいアムール鉄道建設で働き始める。1914年召集されウラジオストックで勤務、西部戦線に従軍、革命後故郷の赤衛隊を経て内戦を闘う。ヴイテフスクの狙撃師団、軍アカデミー、第16狙撃師団司令官補佐を経てトルマチョフ軍政アカデミー戦術上級指導者(1928年4月～29年12月)、1930年1月第40狙撃師団長となる。1932年2月、ザバイカル強化地区司令官兼軍事コミッサールに任命される。1934年2月から35年9月第13狙撃軍団長、1935年9月～第4狙撃軍団長、1937年8月赤軍軍事技師アカデミー校長、1937年8月ソ連ソヴナルコム付設極東軍事建設局長となる。1938年5月26日逮捕され、8月26日処刑された〔Черушев Н.С. и Ю.Н. 2012：105-106〕。
- (96) 本文書は、4月19日14時に暗号解読された。

## 引用文献

РГВА：Российский Государственный Военный Архив (ロシア国立軍事公文書館)

РГАСПИ：Российский Государственный Архив Социально-Политической Истории (ロシア国立社会政治史公文書館)

\* 本稿で引用している公文書館史料の番号は、фонд(文書群)、опись(目録)、дело(一件書類)、страницы(リスト)を、/で区切って順に記している。最後のリストは複数になる場合があるが、その文書の裏面を指す場合は об. で示し、書類の綴じ方によっては変則的に数字が大から小へ少なくなる場合もある。

Близи́нченко С.С.

2017 Комиссар Балтики. Начальник Военно-морских сил РККА В.И. Зоф // Военно-исторический журнал, No. 7. С. 86-93.

Зайцев Ю.М., Близи́нченко С.С.

2013 О.С. Солонников, Организатор морской обороны Дальнего Востока СССР в 1932–1937 гг. // Россия и АТР, No. 4. С. 192-200.

Каши́цин М.

2010 Мы хотели переплунуть Америку // Вечерний Новосибирск, 30 января 2010 г.

Кондрашин В.В.

2011 Голод в СССР. 1929–1934. В 3-т. Т. 1, 1929 – июль 1932., в 2 кн. Кн-1. Москва.

Кулешов А.С.

2009 По специальности совпарработник: Утраченная биография заместителя наркома // Родина, No. 3. С. 92-94.

Петров Н.В., Скоркин К.В.

1999 Кто руководил НКВД, 1934–1941: Справочник. Москва.

Сахаров А.Н., Христофоров В.С.

2017 «Совершенно секретно»: Лубянка – Сталину о положении в стране (1922–1934 гг.): Сборник документов в 10-ти томах. Т. 10 (1932–1934 гг.) В 3-х частях. Ч. 1. Москва.

Сойко Н.

2005 Большой торпедный // Моделист-конструктор, сентябрь (№ 9)

Соловьев А.В.

2002 Тревожные БУДНИ забайкальской контрразведки (говорят архивы спецслужб Читинской области). Москва.

Сорокина Т.В.

2008 История создания и развития оборонно-промышленного комплекса России и СССР.1900–1963: документы и материалы. Т. 3. Становление оборонно-промышленного комплекса СССР (1927–1937). Ч. 1 (1927–1932). Москва.

Шинин О.В.

2006 Проведение органами ГПУ-НКВД активных мероприятий в 1922–1941 гг. (на материалах Дальневосточного региона) // Труды Общества изучения истории отечественных спецслужб. Т. 2. Москва, С. 151-166.

Хаустов В.Н.

2011 Лубянка. Советская элита на сталинской голгофе. 1937–1938. Архив Сталина: Документы и комментарии. Москва.

Черноваев А.А.

2008 На прием у Сталина. Тетради (журналы) записей лиц, принятых И.В. Сталиным (1924–1953 гг.). Справочник. Москва.

Черушев Н.С., Черушев Ю.Н.

2012 Расстрелянная элита РККА (командармы 1-го и 2-го рангов, комкоры, комдивы и им равные): 1937–1941. Биографический словарь. Москва.

2014 Расстрелянная элита РККА 1937–1941: Комбриги и им равные. Москва.

ビル・ガストン

1996 『世界の航空エンジン①レシプロ編』、見森昭、川村忠男訳、グランプリ出版。

寺山恭輔

1998a 「満州事変とソ連における「備蓄」の構築」『東北アジア研究』第2号、173-198頁。

1998b 「ソ連極東における鉄道政策：軍事化と政治部設置(1931～34年)」『西洋史学論集』第36号、1-18頁。

2000a 「ソ連極東における鉄道政策(二)：ハムと鉄道軍特別軍団」『西洋史学論集』第38号、80-97頁。

2000b 「ソ連極東における動員政策：1931–1934年」『ロシア史研究』第66号、61-82頁。

2005 「スターリンと満州：1930年代前半のスターリンの対満州政策」『東北アジア研究』第9号、89-110頁。

2017a 『スターリンとモンゴル』みすず書房。

2017b 「1920年代ソ連の極東政策」『二十世紀研究』第18号、25-57頁。

2020 「満洲事変とスターリン、ガマルニク」、寺山恭輔編『スターリンの極東政策：公文書資料による東北アジア史再考』古今書院、31-68頁。

2021 「満洲事変にソ連の兵士、指揮官はどのように反応したのか？」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』第33号、1-18頁。

2022a 「1930年代ソ連極東・シベリアの鉄道政策：体系的輸送計画の構築」『東北アジア研究』第26号、1-31頁。

2022b 「1930年代初頭のソ連における潜水艦・魚雷艇建造と極東への輸送」『セーヴェル』第38号、110-142頁。

